

第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム 東京東大和大会（オンライン大会）

2021年10月2日（土）～3日（日）

「戦争遺跡を活用し、平和の思いを伝えよう
～戦争被害者・加害者にならないために～」

大会報告集



2度目の修復工事を終え、公開が始まった旧日立航空機立川工場変電所（2021年10月撮影）

主催 戦争遺跡保存全国ネットワーク
第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京東大和大会実行委員会

共催 東大和・戦災変電所を保存する会／浅川地下壕の保存をすすめる会／武蔵野の空襲と戦争遺跡を記録する会／調布飛行場の掩体壕を保存する会／八王子平和・原爆資料館／陸軍少飛平和祈念の会／731部隊遺跡世界遺産登録を目指す会／軍医学校跡地で発見された人骨問題を究明する会／戦争体験放映保存の会

後援 東大和市 東大和市教育委員会 東京都建設局西部公園緑地事務所
公益財団法人たましん地域文化財団

第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京東大和大会 オンライン大会の開催にあたって

戦争遺跡保存全国シンポジウム25年の歴史のなかで初めてのオンライン開催となった「東京東大和大会」にご参加いただき、あらためてお礼申し上げます。

当初、2020年8月22日～24日に開催の予定であったこの大会は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、1年の延期を強いられることとなりました。しかも、その後もこの世界的な災禍は下火とならず、例年8月下旬に開催してきたシンポジウムの会場確保や、東京オリンピック、パラリンピックと時期が重なることを念頭に計画していた宿泊施設の確保について、施設を管理する側の同意を得ることができず、開催時期を10月に変更し、宿泊施設確保の断念などを前提として準備をすすめてまいりました。

しかし、その後もコロナ禍の状況は改善せず、戦争遺跡保存全国ネットワークとの話し合いの結果、全国から都内に参加者が集まる集会の開催は困難と判断し、オンライン方式による開催となったものです。

思えば、私たちが東京都東大和市において全国シンポジウムを開催したいと熱望したきっかけは、住民と行政が協力して保存を実現し、1995年の東大和市文化財指定にあわせた1回目の建物修復と、東大和市内外の多くの方の募金を含めて2020年から21年にかけて2度目の修復工事を終えた「旧日立航空機立川工場変電所」を全国の戦争遺跡の保存運動に関わる皆様に直接見ていただきたいという思いがあったからです。加えて、軍関係の施設・学校や軍需工場が多く存在し、そこで育った兵士や生産された兵器を戦地に送り出し、それがためにきわめて悲惨な空襲被害を受ける結果となった多摩地域において、今も数多く残る戦争遺跡の実態（保存されているもの、消滅の危機にあるもの）を見ていただきたいと思ったからです。そして、この「東京東大和大会」のサブタイトルを「戦争遺跡を活用し、平和の思いを伝えよう～戦争被害者・加害者にならないために～」として、仕切り直しをしたところです。

オンライン方式の大会のため、残念ながら今回の大会では当初3日目の行事として予定していた変電所内部の見学と多摩地域の見学会を行うことはできず、1日目の全体会、2日目の分科会により構成することとなりました。私共としても口惜しい限りですが、いつの日か世界が平穏な状況に戻った時にはあらためて全国から多くの方々が集う対面式の集会を実現したいと思っています。

私共にとってはきわめて不慣れなオンラインによる運営のため、スムーズな進行が行えるか大きな不安もあります。ご参加の皆様にはぜひひろい御心でご参加いただき、運営・進行にご協力いただきますよう、お願いいたします。

2021年10月2日

第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京東大和大会実行委員会

目 次

- ・日 程 表・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- ・東大和市長歓迎あいさつ・・・・・・・・・・ 2
- ・基調講演 「戦争の記憶から記録へ」 加藤聖文先生・・・・・・・・・・ 3
加藤先生プロフィール
- ・基調報告 「戦争遺跡保存の現状と課題2021 -保存問題を中心に-」・・ 16
出原恵三（戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表）
- ・地域報告1 「多摩地域の戦争遺跡」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
齊藤 勉（浅川地下壕の保存をすすめる会）
- ・地域報告2 「大規模修繕後の旧日立航空機変電所」・・・・・・・・・・ 32
後藤祥夫（東大和・戦災変電所を保存する会）
- ・多摩地域の自治体の平和への取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
- ・分科会報告者一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
- 〔第一分科会：保存運動の現状と課題〕
 - 1-1 「山梨県の戦争遺跡と朝鮮人労働者の動員」・・・・・・・・・・ 46
鮎沢 譲（山梨県戦争遺跡ネットワーク）
 - 1-2 「本土決戦準備期における湘南～二宮・大磯・鎌倉の戦争遺跡の現状」・・ 48
中田 均（浅川地下壕の保存をすすめる会）
 - 1-3 「海軍山陰航空隊大社基地跡の現況と今日までの保存活動」・・・・・・・・ 50
西尾良一（平和を願い島根の戦跡を語る会）
- 〔第二分科会：調査の方法と整備技術〕
 - 2-1 「横須賀海軍航空隊茅ヶ崎派遣隊のレーダー基地」・・・・・・・・・・ 51
工藤洋三（空襲・戦災を記録する会全国連絡会議）
 - 2-2 「九州の遙拝遺構と熊本県の現況」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
高谷和生（くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク）

2-3 「松本市里山辺地下壕の入り口崩壊と修復
および地下壕内の地質構造の概略」・・・ 55
平川豊志（松本強制労働調査団）

〔第三分科会：平和博物館と次世代への継承〕

3-1 「東京裁判開廷75周年を迎えて―東京裁判の〈遺産〉を継承する」・・・ 57
春日恒男（防衛省・市ヶ谷記念館を考える会）

3-2 「〔PTSDの日本兵と家族の交流館〕が目指すこと」・・・ 59
黒井秋夫（東大和戦災変電所を保存する会）

・分科会まとめ・・・ 61

・大会アピール・・・ 63

「戦争遺跡を活用し平和の思いを伝えよう～戦争被害者・加害者にならないために～」

日 程 表

第1日目（10月2日）全体会

- 9：55～ オンライン大会運営にあたっての説明および注意
司会 金井安子（実行委員 調布飛行場の掩体壕を保存する会）
- 10：00～ 開会あいさつ
小須田廣利（実行委員長 東大和・戦災変電所を保存する会）
- 10：05～ 歓迎あいさつ（ビデオメッセージ） 尾崎保夫東大和市長
- 10：15～ 基調講演「戦争の記憶から記録へ」
加藤聖文先生（国文学研究資料館准教授）
- 11：20～ 基調報告「戦争遺跡保存の現状と課題2021 保存問題を中心に」
出原恵三（戦争遺跡保存全国ネットワーク共同代表）
- <11：50～ 13：00 休憩>
- 13：00～ 地域報告1「多摩地域の戦争遺跡」
齊藤 勉（実行委員 浅川地下壕の保存をすすめる会）
- 13：35～ 地域報告2「大規模修繕後の旧日立航空機変電所」
後藤祥夫（実行委員 東大和・戦災変電所を保存する会）
- 14：10～ 閉会あいさつ
幅 国洋（戦争遺跡保存全国ネットワーク事務局長）
- 14：20～ 連絡事項 閉会

第2日目（10月3日）分科会

- 9：55～ オンライン分科会にあたっての説明および注意
- 10：00～11：30 分科会1「保存運動の現状と課題」（報告3本）
- 11：30～14：00 分科会2「調査の方法と整備技術」（報告3本）
- <途中休憩12：00～13：00>
- 14：00～15：00 分科会3「平和博物館と次世代への継承」（報告2本）
- 15：00～15：15 まとめ・諸連絡 （15：15閉会）

東大和市長 歓迎あいさつ

<2021年9月23日-木・祝 変電所前にて収録>

みなさん、こんにちは。「第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東京東大和大会」の開催、おめでとうございます。

開催地、東大和市の市長の尾崎でございます。

本来なら、昨年、当市の市民会館で実施予定でしたが、新型コロナウイルス感染症のため中止となり、今年はオンラインでの開催となってしまいました。非常に残念ではありますが、オンラインにはオンラインの良さがあるのではないかと期待しているところです。

さて、後方の建物が、東大和市の戦災建造物である「旧日立航空機株式会社立川工場変電所」です。この変電所は、今も建物として現役で戦争の悲惨さを伝えながら生き、東大和市の平和事業のシンボルとして活躍しています。

昭和13年に軍需工場へ電気を供給するために誕生しました。変電所の南側に第1工場、東側に第6工場、西側に第7工場がありました。

昭和20年の終戦の年、2月と4月の3回にわたり大空襲を受けました。

周りの工場施設は壊滅的な被害を受けましたが、この変電所だけは奇跡的に生き残り、民生品工場の変電所として、傷跡を残したまま、第二の人生を歩み始めました。

平成に入って、工場の撤退に伴い解体の運命となりましたが、多くの市民、都民の皆様の保存運動により保存が決まり、その後、保存のための修復が行われ、東大和市の平和のシンボルとして第三の人生を歩みだしました。

今日まで、東大和市の平和事業の中心的な役割を果たしてきましたが、昭和13年に誕生してから83年が経ちます。老朽化が激しくなり、このままでは平和のシンボルとしての活動にも支障を来すこととなります。

そこで、東大和市ではふるさと納税を活用し、平和を愛する多くの人々と手を携え、変電所の保存改修工事を進めることとしました。おかげさまで日本中からご寄付をいただき、保存工事を進めることができました。平和への熱い思いに対しまして心から感謝申し上げます。

ふるさと納税の「返礼品」は、「平和への熱い思い」としました。それは、平和な世界は、一人ひとりの「平和への熱い思い」が一つになった時に得られるものと考えからです。将来にわたり熱い思いを持って、平和事業を多くの皆様と手を携えて進めていきたいと私たちは願っています。

今回の保存工事終了後は、公開日を週2回とし、説明員も配置してまいります。「緊急事態宣言」解除後には、ぜひ、ご来場いただければと思います。

最後になりますが、平和への熱い思いを持ってシンポジウムに参加されている皆さんと共に、このシンポジウムが盛会のうちに終了されますことを心より祈念申し上げ、ご挨拶といたします。ありがとうございます。



令和3年10月2日

東大和市長 尾崎保夫

「戦争の記憶から記録へ」

国文学研究資料館准教授 加藤聖文

今まで戦争について当たり前のように思っていたことが、戦争が終わってから 80 年もたとうとしている今、記憶で語るのではなく残されたもので戦争を語らなければならない時代になった。いくつかの事例を参考に、今後の在り方について考えてみたいと思う。

戦争の資料はいろいろなところがあり、内容も形状も多種多様な資料が混在しており、その歴史的な解釈がいろいろある。ひとつのものでも解釈により、平和のためなのか、戦争賛美なのか、解釈により変わってくる。そのため、説明文の書き方も難しく、展示が難しい。また戦争の時代の日本は、今の日本の範囲とはイコールではないため、日本のことなのに、私事と認識しにくい。さらに、「戦争」を想像できない世代が増えたことにより、社会的な共通認識が消滅した。そのため、地方の博物館で受け入れたがらない。加えて、国の施設として平和祈念資料館（総務省）、昭和館（厚生労働省）はあるが、積極的な資料収集機関ではなく、一般国民に向けたものではない。ではどこに資料は集まっていくのか。日本では私設資料館任せとなり、その私設資料館を維持しているのは「変わった人」と思われて、地域とのつながり、サポートのない状況である。

また、博物館の学芸員でも当時の制度を知らないことから、資料の真偽を判断できなかったり、保存についての知識がないことから、劣化するに任すほかない事例が多い。

一例をあげると、東北の県立博物館に展示されていた「臨時召集令状（赤紙）」は、本物ではなかった。赤紙を受け取った人は、必ず赤紙を持って、連隊本部へいく。赤紙を持って行くことで、連隊では本人が来たと確認しそれを受け取り、確認できれば処分してしまう。したがって、赤紙自体が残っているということは、徴兵拒否をしたとか、すでに本人が亡くなっていたというような、非常にまれなケースということができる。このことを知っていれば、この赤紙は本当に本物なのかという疑問がわくはずである。実際本物とされる赤紙は、日本に 10 点あるかないかといわれている。

役所にある戦争記録は未整理で、公開制度が整備されておらず、保存環境もよくない。戦後の援護関係部局にある大量の資料を開示請求することは可能であるが、これも整理されていないことから職員もよくわからず、「文書不存在」という結果になる。さらに資料の開示を阻むものに、「個人情報保護条例」がある。この条例は国の個人情報保護法と

異なり、死没者も保護の対象であり、適用除外がない。そのため、情報開示請求の結果開示されたものは「墨塗り」ばかりで、請求者は不満、職員は無駄な努力で、何ら得るものはないのではないだろうか。また、市民も深く考えることなく「個人情報」を受け入れている。

知らず知らずのうちに戦争の記憶が失われており、知らないうちに資料がなくなり、戦争の記憶が消えていき、消え去ってしまったことさえ気が付かないでいる。今まさに我々はこのような時代に突入しており、戦争体験者の記憶をどのように次世代に伝えていくのかという命題に向き合わなければならない。そのためには記録、残されたものを残して後世に伝えていくことが必要である。

海外に目を向けると、市民に生々しいことを公開している。例えばかつての「東ドイツの秘密警察（シュタージ）」の本部が博物館となっており、尋問の様子や、盗聴をどのようにしたかを物資料やパネルで紹介している。隣にはアーカイブス（公記録保管所）があり、東ドイツ崩壊直前に破棄されようとしていたシュタージの資料を、市民が差し押さえて一般公開している。

内容は、シュタージによる旧東ドイツ市民の個人監視情報である。密告社会であったことから、親しいと思っていた友人・隣人が密告者だったケースが続発したが、社会が共有すべき歴史と個人が持っている歴史は別で、不都合な真実であろうが、現実を直視しなければならない。歴史にはきれいなことも汚いものもある。その現実を直視することによって、そこからさらに良い社会を築いていくために、その現実を証明する歴史記録を共有することで国民全体で考えていこう、結論は出なくても「考えることが大事」という立場で、資料を保存公開している。

一方バルト三国の場合、ソ連から独立した国々であるが、今でもロシアと隣接しており、独立した今でもロシアを意識していかなければならない国々である。気を許すといつまた占領されたり、支配されかねないという思いがあり、その国々の中では国家のアイデンティ、自分たちの国とは何か、どのような歴史を持った国なのかについて非常にこだわりを持っている。リトアニアを含むバルト三国は、国家のアイデンティティ、もたもたしていると過去になってしまうということをかかなり強調しがちであり、その中でソ連時代を「負の遺産」としてとらえている。リトアニアの特別公文書館には、シュタージと同じようにリトアニア市民の監視記録が大量に残されており、全てがオープンになっている。個人情報をオープンにするのは、個人の監視が行われていたことを

社会が共有することで、自分たちの国の独立の大切さを強調している。アーカイブスだけでなく博物館もあり、バルト三国は共通して、ソ連時代のことを「占領期」と表記しており、国家のナショナルアイデンティティを強調する姿勢が明確にある。各国とも占領博物館といったもの作られているが、リトアニアの場合は「占領」という言葉さえ使わず「ジェノサイド」という言葉を使っており、「ジェノサイド博物館」という言い方をして表記し、占領時代にリトアニア人が、いかに弾圧されて、ひどい目にあつたかをかなり強調している。しかし、ナショナルヒストリーが強調され、強調されるあまり、ナチスの占領時代にユダヤ人の大量虐殺がおこなわれたことについて、リトアニアではどのように評価されているのかというと、あまり触れられていない。博物館もあるが、あくまでもユダヤ人コミュニティによる私設の博物館であり、国レベルでユダヤ人虐殺に取り組もうとはしていない。それよりもその時代のリトアニアの国民たちは、身内・兄弟でさえ、かたやナチスにつき、かたやソ連について戦うという状況にあつたことから、歴史的な評価が非常に難しいのと同時に、ナショナルヒストリーを強調せざるを得ないことになる。戦争をめぐる博物館の問題は、思い切りナショナリズムと結びついてくるので、かなり難しい。

近代国家は国民国家であるので、国家に行為によって失われた命は、主権者である国民が全体で受け止めなければならない。国家の行為で人の命に係わる最大のもは戦争であり、行為の結果多くの人々が亡くなればならぬ、「亡くなられて残念でしたね」で終わらせることはできないということが前提としてある。失われた人の命は個々人の名前を明らかにしなければいけない。先の大戦で200万人の人が亡くなりましたなどと、数字としてあらわされてしまったらなんの意味はなくて、亡くなった人一人一人の名前が必要であり、その人たちの生き様という悲劇を社会が共有していかなければならない。身内ではなく他人ではあっても、他人に対して想像力を働かせて、その人が生きていたということを感じるにより、はじめて戦争に向き合うことができ、その悲惨さを実感することができるのではないだろうか。

数字で何万人亡くなりましてといわれても、悲惨さを実感できたかというとはなはだ怪しいのではないか。悲惨さを実感できるためには、戦争の記憶というものを表象化していかなければいけない。その表象化されたものが記録になる。記録自体を残すことによって、同時に戦争体験者の証言、いわゆる記憶という戦争体験者の口述を記録化していくということも重要になる。ビデオに撮ったり、録音したり、さらにそれを文字に起

こしたりすることも当然大事になってくる。

体験者がいなくなっていく中で、それらの記憶を第三者が聞いて、また次の人に伝える「語り部」ではなく「語り継ぎ部」がこれから必要になってくる。第三者の記憶に共感して伝えていくというコンセプトの中から見れば、あかの他人が語り部をやって何の意味があるのかという批判も当然あるが、そうではなくて第三者がどのように感じ、考えていたかを社会に向けて発信するということは、これこそが社会における戦争体験の共有化だと考える。

日本の現状として必要なのは「平和資料館」ではなく、「戦争博物館」であるとここで強調しておきたいと思う。記録を保管する場所、戦争体験の記憶の保管庫として「戦争博物館」がぜひ必要なのではないか。「戦争博物館」というと英雄たちの顕彰とか、国家のアイデンティとかにどうしてもぶれていってしまうが、やはり戦争という現実を直視してその本質を考える場として「戦争博物館」が大事なのではないか。「平和」としてしまふとなんとなく抽象的な話になってしまうし、「平和、平和」といってしまうと戦争は悪いもの、戦争のイメージはひどい、ネガティブなイメージと社会的にみられてしまう。最初に立ち戻ってみると、戦争はあまり考えないでおこう、博物館でも「戦争ものはちょっと・・・」とかという方向に流されて行ってしまうのではなか。戦争を直視する、真正面から向き合ことが今後のわれわれにとって必要なのではないか。ただ、向き合った結果どのような答えを出すか、解答というもの、正解はない。「戦争とは何なんだ」と自分たちで考えていく、ひたすら考え続けていくことが、「戦争博物館」の中で必要なコンセプトなのではないかと考える。

2021.10.2 第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム

戦争の記憶から記録へ

加藤 聖文
mifuyokiutoka@gmail.com

I. 戦争資料をめぐるさまざまな課題

◎民間にある戦争資料...受け皿が無い！

- ⇒量が多い・形態が複雑（コピーや書籍も混在）・歴史解釈が厄介・展示に向かない
- ⇒今の「日本」の範囲と結びつかない（満洲引揚、東南アジア占領、朝鮮植民地支配などすべて「外国」の出来事）
- ⇒「戦争」を想像できない世代の増加...社会的共通認識の消滅（なぜ戦争を扱わなければならないのか？根源的な問いがなされていない）

↓

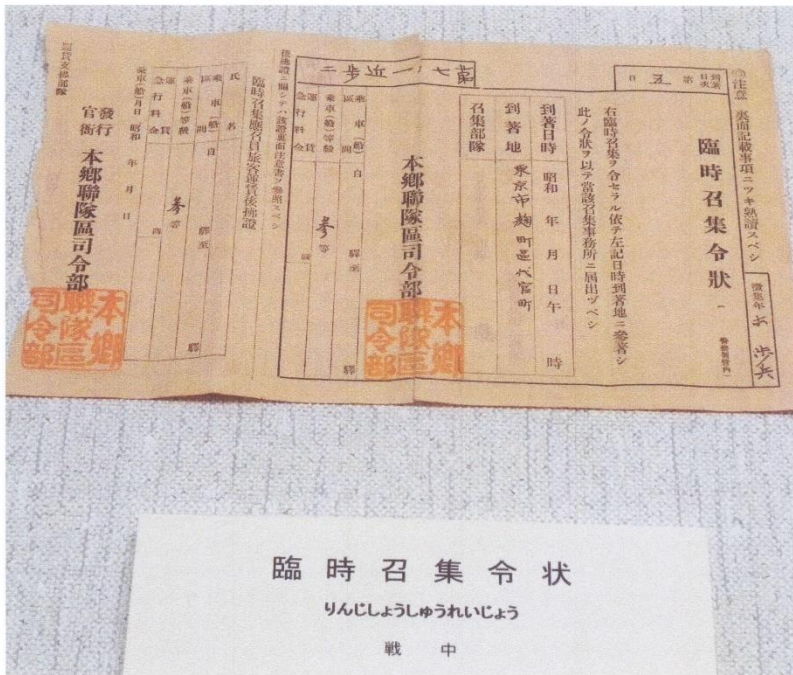
★地方の博物館は積極的に引き受けたがらない！
...日本の博物館は「文化」「前近代」中心。近代史しかも戦争のような生々しい歴史を敬遠する（学芸員の専門知識不足）。

★国立の施設がない！

...平和祈念展示資料館（総務省）・昭和館（厚労省）など「施設」はあるが積極的な収集機関ではない。また、それぞれ省庁の縦割り行政の影響を受け、横の繋がりが無い。省庁の「事なかれ主義」の影響が強く、職員も萎縮する。

↓

★結果的に個人の努力任せ...私設の資料館⇔地域との繋がりが弱く地域住民のサポートが少ない...戦争資料は地域性が強いにもかかわらず孤立しがち



「臨時召集令状」いわゆる「赤紙」

県立博物館レベルでも偽物とわからず堂々と展示している。

「赤紙」は当時の多くの男性が受け取っているが、現存するのは10点あるかないか。なぜか？

徴兵制度の仕組みを理解していないとその理由はわからない。しかし、今ではその仕組みを理解している人（学芸員も）はほとんどいない。



武富戦争資料館（福岡県小竹町）

個人で集めた戦争資料を一般公開する目的で開設。手弁当＋寄付金のみで運営されているが、公的な支援は皆無。また、専門家不在なので保存環境は決して良いとはいえない。

日本にはこのような施設が多い。

◎役所にある戦争記録...公開制度が未整備！

⇒行政文書...市町村レベルでは公文書館がないため市民の目に触れない。

*合併された旧町村役場が所蔵していた兵事関係文書...未整理・保存環境不良

*援護関係部局に眠る大量の文書...情報公開制度で開示請求をすることは可能

⇒職員もよくわからないため「文書不存在」になる（隠蔽しているわけではない）。

⇒「個人情報」の壁...地方自治体の個人情報保護条例が抱える大問題...国の保護法と大きく異なり死没者にも適用・適用除外が無い

↓

墨塗りだらけの文書開示...請求者は不満+職員は無駄な労力

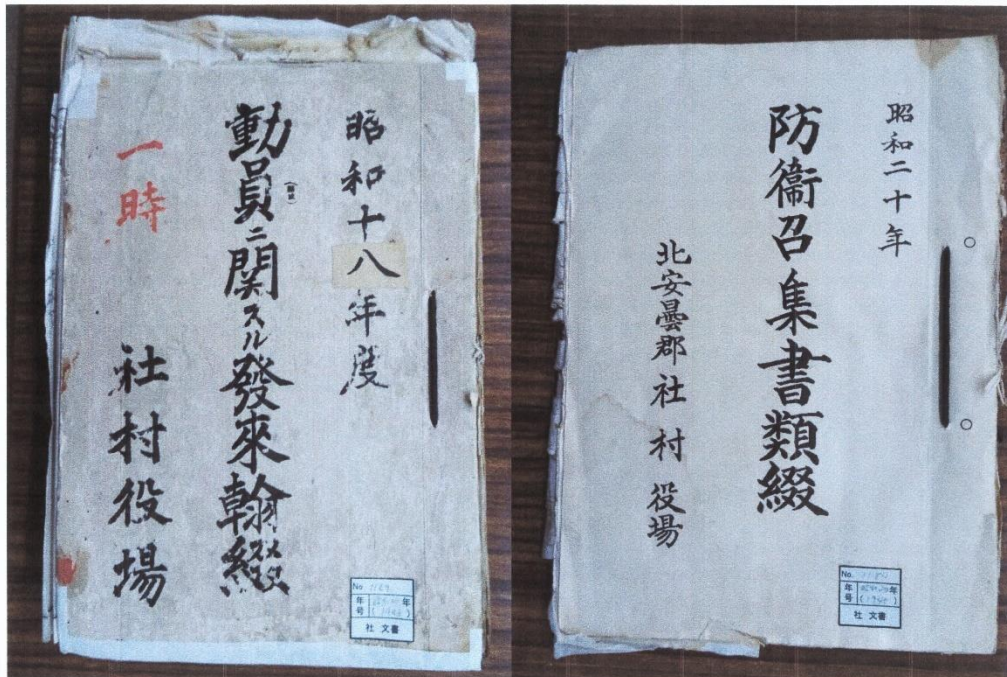
↓

★確かに個人名が消されていても内容がわかれば問題ないが...

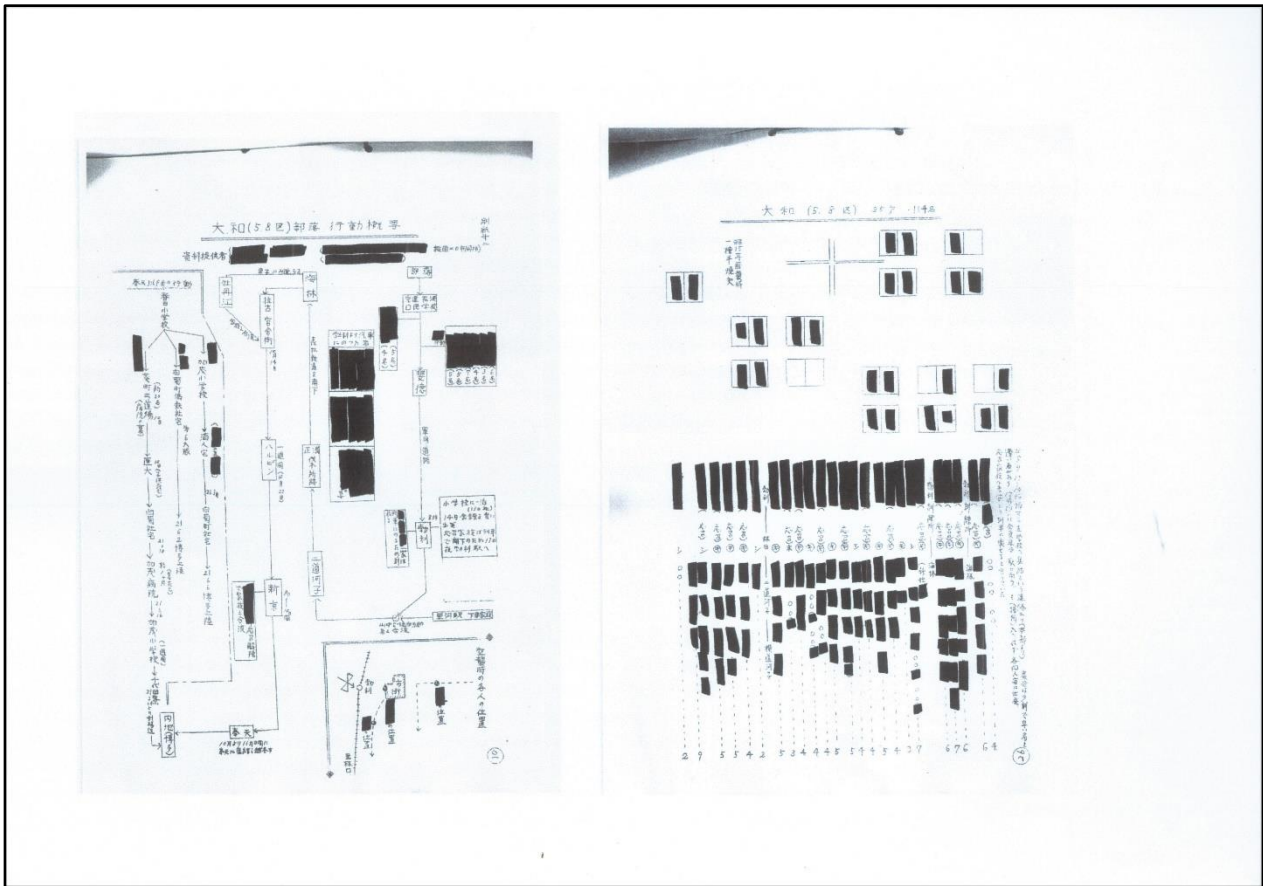
そもそも、個人名を消してしまうと故人の無念を誰がくみ取ることができるのか？

その回路を行政が機械的な法律解釈で遮断してしまうことは、戦争犠牲者に対する冒瀆では？

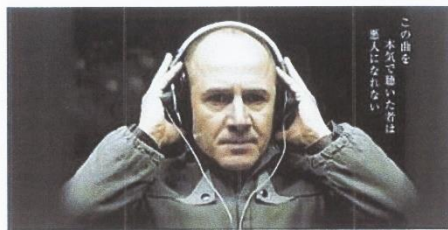
⇒しかし、市民の側も空気に流されて深く考えずに「個人情報」を受け入れているのが実情。



地方には戦争の実像を明らかにする「兵事関係文書」が以外と多く残されている。しかし、公文書館がないためこれらの存在はほとんど知られておらず、管理状態も悪い。また、役所に保管されている場合、「個人情報」の壁に阻まれることもある。



II. 諸外国の事例：東ドイツの秘密警察（シュターゲStasi）



東独政府崩壊直前にシュタージは文書をシュレッターにかけて廃棄しようとしたが、東独市民が押収⇒文書を復元して公開。内容はシュタージによる旧東独市民の個人監視情報。
* 市民なら申請すれば誰でも閲覧可能⇒友人が密告者だったケースが続発（でも公開は続ける）
* 「社会が共有すべき歴史」のコンセンサスが確立している。現実を直視しよりよい社会を築くためには情報を共有し、国民全体で考えることが大切という考え。



リトアニア国立特別公文書館（旧ソ連時代文書）

ソ連時代の市民監視記録を公開。外国人にも公開。一部非公開記録があるが、原則全面公開。
* リトアニア以外のバルト三国（エストニア・ラトビア）も同じ様な記録を公開。国家独立のアイデンティティのためにソ連時代の負の遺産は積極的に公開。



*バルト三国ではソ連時代を「占領時代」と位置づけており、占領時代に特化した博物館もある。これらは国家のアイデンティティと深く結びついており、ナショナル・ヒストリーの要素が濃い。なかでもリトアニアは「ジェノサイド博物館（旧KGB本部）」（写真左）と称してソ連に対する批判が先鋭的。ただし、同じリトアニアがナチス占領期に行われたユダヤ人虐殺に関しては国立の施設では言及されておらず、民間施設がその歴史を伝えるのみ。

バルト三国はナチスとソ連に占領された歴史がある。エストニアは同国人同士が独ソに分かれて戦った経緯もあり、その歴史解釈をめぐって複雑に揺れている（写真右はエストニアの占領博物館）。



Ⅲ. まとめ：戦争の記憶はなぜ継承しなければならないのか？

- ◎国民国家である限り、国家行為によって失われた国民の命は、主権者である国民全体が受け止めなければならない（交通事故や私怨による殺人事件とは異なる）。
- ◎犠牲者個々の名前を明らかにすることは、個人の悲劇を社会が共有するために不可欠である。その時代に生きていた見も知らない他人の死に想像力を働かせ、その人の生を感ずることではじめて戦争に向き合い、その悲惨さを実感することができる。
- ◎そのためには戦争の記憶を表象化する記録が残されていなければならない。また、戦争に関わる記録を保存することに加えて、戦争体験者の記憶を記録化することも重要。
- ◎体験者の記憶を第三者が「語り継ぎ部」として次世代に戦争体験を継承することも意義がある...第三者がどのように「感じたか」「考えたか」を伝えることは社会における戦争体験の共有化が広がることを意味する。
- ◎日本に必要なのは「平和資料館」ではなく「戦争博物館」...英雄たちの顕彰でも国家のアイデンティティの確認の場ではなく、「戦争」という現実を直視し、その本質を「考える」ための「記憶の保管庫」が必要...結論も答えもなく、ただひたすら「考える」ことが重要。

加藤聖文（かとう・きよふみ）先生プロフィール

人間科学研究機構国文学研究資料館准教授

1966年12月18日愛知県知多市生まれ。

1991年、早稲田大学社会科学部社会科学科を卒業後、民間企業に勤務

2001年、早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程史学選考単位取得満期退学



【研究】

日本近現代史、東アジア国際関係史、歴史記録学（アーカイブズ学）

海外引揚げ研究、近現代記録の構造認識と管理制度研究

※大日本帝国崩壊の過程において、それまでの植民地、占領地で何が起き、その土地の人々の日本へのまなざしがどのように変容していったのか。また、アメリカ、ソ連、中国の動向を視野に入れつつ、日本人を中心とした人的移動の実態について解明する研究に取り組んでいる。

【おもな著書<単著>】

満鉄全史「国策会社」の全貌 講談社 2006年11月

「大日本帝国」崩壊－東アジアの1945年 中央公論新社 2009年7月
(上記韓国語版) 2010年8月

満蒙開拓団一虚妄の「日満一体」 岩波現代全書 2017年3月

国民国家と戦争 挫折の日本近代史 角川選書 2017年11月

海外引揚げの研究: 忘却された「大日本帝国」 岩波書店 2020年11月

【おもな著書<共著・共編>】

近代日本と満鉄 吉川弘文館 2000年4月

旧植民地図書館蔵書目録 朝鮮篇 ゆまに書房 2004年3月

台湾総督府臨時情報部「部報」 ゆまに書房 2006年3月

中国占領地の社会調査 近現代資料刊行会 2011年

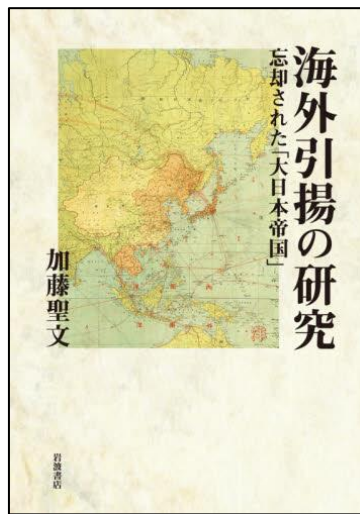
挑戦する満州研究－地域・民族・時間 東方書店 2015年12月

【講演、テレビ等への出演】

国内主要大学での講演のほか、中国、韓国などでの講演多数

戦争の“負の歴史”後世にどう残す 2019年 NHKおはよう日本 ほか

記録映画『嗚呼 満蒙開拓団』（羽田澄子監督作品） 2008年



加藤先生の主な著書

基調報告

戦争遺跡保存の現状と課題 2021 -保存問題を中心に-

戦争遺跡保存全国ネットワーク
共同代表 出原 恵三

はじめに

昨年と今年コロナ禍の中で全国大会に向けて取り組んでくださり、今回初めてのオンラインによる大会に漕ぎ着けてくださった東大和市の実行委員の皆様はじめ関係者の方々に厚くお礼を申し上げたいと思います。

アジア・太平洋戦争が終わって76年となり戦争の記憶は、愈々戦争体験の無い戦後世代が次世代に継承しなければならない時代を迎え、戦争遺跡の重要性は益々高まっています。戦争の記憶は「ヒトからモノへ」というスローガンは1998年の沖縄大会で登場しましたが、その「モノ」自体も限界に来ており積極的に保存対策を講じなければ消滅の危険に晒されているものが少なくありません。

1995年に文化財保護法の指定基準が改定されて四半世紀以上が経過しました。不十分さはあっても行政が戦争遺跡の調査や保存に取り組み始めたことは私たちの運動にとっても大きな力です。文化財指定された戦争遺跡(認定戦争遺跡)は8月末現在で319件を数えます。昨年3月には福岡県が行った戦争遺跡の悉皆調査の成果が『福岡県の戦争遺跡』として刊行されました。このように自治体による悉皆調査の事例も少しずつ増え、ガイドブックの刊行なども見られます。戦争遺跡調査は陸上だけでなく海底の戦争にも及ぶようになってきました。

来年は1997年に長野で「全国ネット」が発足して25年を迎えます。戦争の記憶を刻み反戦平和を願う市民運動として始まった戦争遺跡の保存運動は大きく広がり、戦争遺跡は「近代史研究の資料」、「歴史教育・生涯学習の教材」などとして市民社会に定着しています。しかしながら戦争遺跡に対する意識の高まりや広がり、私たちが求めてきた戦争遺跡保存の方向性とは必ずしも一致していない、あるいは相反する側面も見られるようになりました。戦争のどんな記憶を次世代に継承するのか、加害の意識が欠如した記憶が蓄積されようとしているのではないのか。課題も大きくなってきているように思います。

今年は、満州事変から90年、アジア太平洋戦争の開始から80年という節目の年でもあります。富国強兵を国是として膨張を続けた近代日本とその帰結としての敗戦、2000万人以上のアジアの人々の命を奪った侵略戦争に向き合い、その「証」としての戦争遺跡をどのように捉え、向き合っていくのかということは、コロナ禍の次の世界を展望する上においても大きな意味を持つことだと思います。

熊本大会以後の2年間、これまでになく重要な戦争遺跡の保存問題が相次いで生じ、現在も進行中です。この現状を共有して欲しいと思いますので、今回はこのことを中心に報告したいと思います。しかしその前に、戦争遺跡の位置付けや保存のあり方、課題、今後の展望にも関わる重要な事項として、国内外の動向のについて少し触れたいと思います。

1 戦争遺跡をめぐる内外の動向

昨年9月、安倍政権が変わって菅政権が発足しましたが、その最初の仕事が学術会議委員6名の任命拒否でした。戦争の反省から生まれ、戦後築かれてきた民主主義と学問の自由を毀損する暴挙に対して強い抗議の意思を表したいと思います。国際的信頼をも失墜させる恥ずべき行為です。拒否理由を明らかにすると共に法律に則り速やかに任命責任を果たすよう求めます。

歴史認識を大きく後退させる出来事も起きています。その一つが教科書問題です。中学校教科書に記述された「従軍慰安婦」という用語は日本軍が強制連行をしたという誤解をまねくおそれがあるから「単に『慰安婦』という用語を用いるのが適切」とする答弁書を閣議決定(4/27)し、教科書会社にこの答弁書に

基づいた記述をさせようとしています。強制性を認めていた 93 年の河野談話を空洞化・否定し、事実を隠蔽・偽造する許し難い行為と言わなければなりません。ちなみに「慰安婦」という文言は、日本でしか通用しません。国連の文章には「軍事的性奴隷」と書かれています。

二つ目は世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の展示についてです。2016 年の登録の際の約束が守られていません。長崎県端島炭鉱（軍艦島）などの展示について、戦時徴用された朝鮮半島労働者に関しての日本政府の説明は不十分だとする決議案が全会一致で採択されるという不名誉を演じています。日本政府は来年 12 月 1 日までに今後の措置・対応などについて報告書の提出が求められています。その内容を注視していかなければなりません。ちなみにイギリスのリバプールの「海商都市」（18～19 世紀）は世界遺産から抹消されました。

このような国内における戦前回帰的な指向とは対照的に、海外では大きな価値観の転換とでもいうべき事態が進展しています。熊本大会でも少し触れましたが、欧米による植民地支配を問うた 2001 年のダーバン会議から 20 年、被支配国が過去の植民地支配を告発して責任を追究し、それに欧米市民社会が呼応するという動きが世界的に大きな潮流となり、過去に遡って侵略戦争や植民地支配が不正義となりました。第二次世界大戦以降最大の地殻変動として捉えることができるのではないのでしょうか。今年 1 月に核兵器禁止条約が締結されましたが、被爆者の願いとともに世界を動かし始めたこのような大きな変化が背景にあると思います。

2 戦争遺跡の保存問題

(1)旧陸軍広島被服支廠倉庫群

旧陸軍広島被服支廠倉庫は、現存する最大規模の被爆建物です。原爆ドームより 1 年早い 1913 年に竣工し、軍服、軍靴などの製造、修理を行い、ここから大陸などの戦場に運び出されていきました。軍都広島を象徴する建物でもあります。倉庫は元 13 棟ありましたが現在 4 棟残っており、1 棟が国、3 棟が広島県所有となっています。大きさは長さ 91.13m、幅 25.68m、高さ 15.5m の鉄筋コンクリート造りで、外壁は赤レンガを巡らし内壁はコンクリート仕上げの三階建ての巨大な建物です。建築史的にもレンガ造りから鉄筋コンクリート造りへの移行期の建物として極めて貴重な存在と評価されています。

爆心地から 2.7km 離れていたために倒壊や被災は免れましたが、鉄製の頑丈な扉が爆風で曲がるなど原爆のすさまじい威力を今日に伝えています。被爆直後、ここは臨時救護所となり何千人も被災者が収容され、最後を迎えたところです。被爆詩人・峠三吉の「倉庫の記録」にも「きょうも外の空き地に積み上げられた死屍から煙があがる」と生々しい惨状が描かれています。

広島県は、2019 年 12 月初め、安全性の理由から県所有の 3 棟のうち 1 棟のみを外観保存し、2 棟を解体、20 年度にも着手すると計画を発表し、2 月議会で決定しようとしたのです。これに対して広島市民はもとより全国から大きな憤りと疑問が沸騰し保存署名が全国に広がり講演会なども地元のみならず東京でも数回にわたって行われました。その最中、広島出身の寺田稔衆院議員から「駐車場確保のために国所有の 1 棟を解体」という問題発言がありました（20 年 7/28『中国新聞』）。全国ネットは保存署名に協力するとともに文化庁や県知事に対して 4 棟の国史跡指定と世界遺産への追加登録をするよう要望書を提出するとともに、寺田議員に対して抗議文を送りました。

保存を求める大きなうねりの中で県知事は、「解体先送り」、今年 2 月には従来の認識を改め「重文調査の必要性」を認め、6 月には耐震工事を施し保存へと転換し、有識者懇談会を設け活用方法を検討することになりました（国所有の 1 棟も保存）。

(2)旧第 32 軍司令部壕跡の調査と保存

2019 年 10 月 31 日首里城が焼失しました。直ちに沖縄県知事を先頭に再建計画が建てられ全世界から数十億円の寄付も寄せられました。周知のように首里城の地下には沖縄戦の作戦指導をした旧第 32 軍の司

司令部壕が埋もれたままになっています。壕の総延長は1,000m以上と言われており、司令官室や作戦室、通信室、居住区などが設けられていました。壕内には1,000人余りの将兵・軍属・学徒・慰安婦などが雑居していました。周辺では日本軍による住民虐殺もおきています。牛島満軍司令官のもと、本土防衛のための「出血・持久作戦」がここで練られ、住民を凄惨な地上戦に巻き込み犠牲を増大させた軍の南部撤退が決定されたところです。司令部壕は、まさにこのような沖縄戦の性格を決定づけた場所です。

司令部壕跡は、沖縄戦の実相を今日に伝える「生き証人」であり、沖縄戦の悲劇を伝える第一級の戦争遺跡です。沖縄県埋蔵文化財センター刊行の『沖縄県の戦争遺跡』（2015年）においても「その歴史的価値は最も重要なものの一つである」と報告されています。

沖縄県は首里城の再建とともに司令部壕の保存・公開には取り組もうとしていましたが学術調査については安全性を理由に前向きではありませんでした。全国ネットは沖縄平和ネットとともに学術調査を行った上での保存公開を求める署名活動を行い20年12月に沖縄県教育長に2127筆の署名を届けるとともに学術調査を実施するよう申し入れました。今年1月沖縄戦研究者で戦争遺跡にも詳しい吉浜忍さんらを委員とした検討会が設置されています。『琉球新報』（8/23）によると年内に基礎調査を実施することです。詳細な学術調査を実施した上で保存公開し、県が一方的に削除した「慰安婦」「住民虐殺」を記載した説明板の設置を求めたいと思います。

(3) 沖縄南部戦跡の土砂掘削

辺野古新基地建設の埋め立てに多くの住民が犠牲になった南部の激戦地である糸満市や八重瀬町の土砂が掘削されて使われている問題です。遺骨収集市民団体「ガマフヤー」代表の具志堅隆松さんはじめ多くの県民が「遺骨を含んだ土砂を使うな」と訴え沖縄県議会をはじめ市町村の大半で反対意見書が採択されています。韓国の犠牲者遺族や米退役軍人も反対しています。沖縄ネットの北上田さんによりますと「今の状況としては（軍民混在壕の）シーガーアブ（糸満市米須）により一層工事が迫っている、業者は「問題ない」と言い続けている状態です。」とのこと。戦争遺跡を破壊し次の戦争の準備に使うことは断じて許されません。もっと多くの声を結集していく必要があります。

(4) 「大社基地」滑走路跡

出雲市斐川町にある「大社基地」はアジア・太平洋戦争末期に本土決戦に備えて「帝国海軍」が最後の切札として建設した航空基地で、1500m×60mのコンクリート製の滑走路をはじめ弾薬庫や掩体など多くの関連施設が広範囲に及んでいました。米軍の空襲により九州の飛行場が使用できなくなるなか西日本最大の攻撃基地となり、攻撃機「銀河」やそれに懸吊する特攻機「桜花」が集中配備されていました。

戦後、自衛隊訓練所や太陽光発電施設などとして使われてきましたが、西部の600m×60mは財務局官吏地として当時のままの姿で残っています。戦時中、日本国内には秘匿飛行場を含めると250箇所以上の飛行場が建設されましたが、当時の滑走路が原状をとどめている例は、兵庫県加西市の鶉野飛行場と大社基地の二つだけです。滑走路がそのまま残ってきたこと事態、奇跡であり重要な戦争遺跡として位置付けられます。ところが中心遺構である滑走路が今年、民間業者に売却されました。住宅地になろうとしています。

地元では「大社基地」跡の重要性から考古学・歴史研究者・市民が「大社基地の明日を考える会」（会長竹永三男）を3月1日に結成し、出雲市や島根県に対して「大社基地」跡の学術調査の実施とそれに基づく保存・活用を行うよう求めています。遺跡見学会や連続学習講座などを企画し「大社基地」跡の重要性を広く知らせる取り組みも熱心に行われています。これに対して市や県は「滑走路跡地の取得の考え」はなく「一部を学習の場」に残すとの方針（山陰中央新報7/31）のようです。滑走路のもつ広い空間こそが意味を持ち追体験をも可能にします。引き続き応援をしていきたいと思います。

(5) 登戸研究所跡（川崎市多摩区）

1937年に陸軍科学研究所登戸実験場として開設され、生物兵器や風船爆弾などを製造したことで知られ

ています。明治大学は2010年に旧実験棟を活用して平和教育登戸研究所資料館を開設、周辺には実験場時代の遺構が残っており2018年には川崎市の地域文化財にも指定されています。2019年末に新校舎建設案が出され、当時の景観を残す八本のヒマラヤスギやロータリーなどが失われることから保存を求める声が上がっていました。建設案通り進められることになり22年末にヒマラヤ杉は伐採、代替策として大学側は、登戸研究所本部本館とヒマラヤ杉の姿を示すモニュメント、ジオラマなどを新校舎に設置し、新しいヒマラヤ杉並木の植樹を行うことなどを計画しているそうです。

3 戦争遺跡の調査事例など

(1)広島市 サッカースタジアム建設予定地の旧陸軍施設被爆遺構

広島市中区中央公園広場で進められている発掘調査で旧陸軍の「中国軍管区輜重兵補充隊」遺構が14,000㎡の調査区から検出されました。建物基礎や石畳の厩舎遺構、水槽、水路などが良好な状態で検出されており、軍隊生活を伝える遺物も出土しています。輜重隊に限らず旧軍隊施設の遺構でこれほど広範囲に且つ良好な状況で検出された例は全国的にも類例がありません。爆心地から1km以内にあることから原爆投下によって一帯は全壊全焼し400人以上が犠牲になっています。

日本考古学協会は「軍事関連施設については不明な点が多いなか、今回の発掘調査成果は貴重な歴史資料」として位置付け「遺跡の重要性と価値を十分に検討し、事業計画の見直し・現地保存を含めた遺跡の保護策を講じること。」とした要望書を市長に提出、海外からも保存を求める声が寄せられています。現在、石畳など数カ所を切り取って移設する方針のようですが、遺構の広がりこそ意味があります。日清戦争以来の軍都広島と人類初の被爆地ヒロシマという戦争の加害・被害両方の記憶の刻まれた戦争遺跡であり、人類史的な価値をもつ戦争遺跡です。面的に現地保存を行い原爆ドームや被服支廠などとともに保存活用を図るべきです。

(2)国史跡長崎原爆遺構「山王神社」の鳥居を発掘

「一本柱鳥居」として知られる山王神社の「二の鳥居」は国史跡長崎原爆遺跡を構成している遺跡の一つです。かつては四つの鳥居が建っていましたが爆心地から800m程のところのところに位置していたことから他の鳥居は全て飛ばされてしまいました。長崎市では被爆遺構の保護を目的に2016年から発掘調査が行われていますが、2019年12月に「三の鳥居」が発見され、今年2月には「四の鳥居」の柱や笠木などの部材が発見されました。

(3)水中戦争遺跡の調査・「エモンズと特攻機」

「エモンズ」は沖縄戦に参加したアメリカの駆逐艦(2,050t 全長106.2m)で、1945年4月6日に日本軍の特攻攻撃を受け損傷し翌日味方によって沈められました。乗員60名が戦死、77名が負傷しています。2000年に沖縄本島北部の古宇利島(国頭郡今帰仁村)沖の水深40mの海底に沈んでいるのが発見されました。その後周辺からは日本軍特攻機のエンジンやプロペラなども確認されています。

九州大学「浅海底フロンティア研究センター」(菅浩伸教授)では、この海底戦争遺跡の調査プロジェクトを立ち上げ、最先端技術を駆使して精密な写真測量を行い、三次元モデルを作成し詳細に可視化することに成功しています。その結果、エモンズの損傷、砲身の角度などから特攻機がどのような方向から何処に何機がどんな順番で突入したのか「現場検証」を可能にしています。

同時に残存している日米双方の資料の詳細な調査・研究を行い日本軍の特攻攻撃についても部隊名や使用機種について明らかにしています。発見されたエンジン・プロペラから機種は旧陸軍の98式直協偵察機であること、この飛行機で特攻攻撃をした部隊は前橋で編成されて4月6日に新田原飛行場から出た誠第36・37・38飛行隊であることが明らかとなっています。

プロジェクトのウェブサイトには「多くの戦跡水中文化遺産が時間の経過とともに朽ちかけています。正確な記録を残すとともに、今後はその保存についても考えていかなければなりません。」と記されています。

す。

(4)桶川飛行学校平和祈念館（埼玉県桶川市）

熊谷陸軍飛行学校桶川分教場建物については全国シンポでも何度か取り上げられました。「旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会」によって2008年以来熱心な保存運動が続けられ、2016年に残存建物5棟が市有形文化財となり、その後解体修理復元が行われ2020年8月4日に桶川飛行学校平和記念館として開館しました。

(5)『福岡県の戦争遺跡』刊行

福岡県教育委員会は2017年度から3ヶ年で県下の戦争遺跡の悉皆調査を実施し2020年3月に報告書が刊行されました。A4版232頁で624件の戦争遺跡が鮮明な写真・図面で示されており、それとは別に「碑」（慰霊碑・忠魂碑など）1025件が一覧表にまとめられています。また戦争遺跡や戦争関連の記述のある県下の自治体史とその記載内容の紹介もしています。（福岡県教育委員会『福岡県の戦争遺跡 福岡県文化財調査報告書第274集』2020年）

4 戦争遺跡 指定・登録文化財の動向

(1)戦争遺跡 指定・登録文化財一覧

2021年8月22日 319件 (306)

●国指定文化財40件、◎県指定18件、○市区町村指定141件(134)、▲国登録文化財94件(93)、△市区町村登録文化財15(11)、◇道遺産・市民文化資産11件 ※新たに指定・登録されたものには実線、過去に指定・登録されていて漏れていた遺跡は波線で表示、()内は前回の数字

北海道 (42件)

札幌市琴似屯田兵村兵屋跡●、同新琴似屯田兵中隊本部○、同西岡水源池取水塔▲、同武四郎邸◎、旭川市旧旭川偕行社●、同旧陸軍第7師団騎兵第7連隊覆馬場▲、同永山屯田兵屋○、同旭川兵村中隊記録及び屯田物語原画綴り○、同第7師団関係記○、同旭川兵村中隊記録（追加）○、同旧陸軍第7師団北鎮兵事記念館▲、江別市野幌屯田兵第2中隊本部◎、同江別屯田兵第3大隊本部火薬庫○、滝川市滝川屯田兵屋○、同滝川屯田兵第2大隊第3中隊文書◎、深川市屯田兵屋○、同屯田兵歩兵第1大隊本部跡○、同屯田兵監の壕◎、美唄市美唄屯田兵屋◎、同美唄屯田騎兵火薬庫○、根室市和田屯田兵碑○、同和田屯田兵の被服庫◎、厚岸町太田屯田兵屋◎、標津町川北海軍航空基地（掩体・戦闘指揮所）○、室蘭市輪西屯田兵火薬庫○、同輪西屯田兵記念碑○、同輪西屯田兵関係資料（軍服印鑑）○、同青い目の人形○、士別市士別屯田兵屋○、北見市屯田兵屋○、同旧野付牛屯田第4大隊中隊本部被服糧秣庫○、同ピーボディ・マルチニー銃○、同屯田兵人形（75体）○、稚内市大岬旧海軍望楼○、同旧海軍大湊通信隊稚内分遣隊幕別送信所○、同旧陸軍砲台指揮所○、剣淵町剣淵屯田兵屋○、同元屯田兵射的場○、美瑛町陸軍演習場廠舎門柱○、富良野市東中尋常高等小学校御真影奉置所○、函館市函館要塞と砲台◇、別海町旧柏野尋常小学校奉安殿○

東北 (12件)

青森県（6件）青森市幸畑陸軍墓地○、同歩兵5連隊第2大隊遭難記念碑○、むつ市旧大湊要港部乙第十号・第十一号官舎○、同旧大湊水源地水道施設●、弘前市旧弘前偕行社●、同旧第8師団長官舎▲

岩手県（4件）一関市洪民観音寺の梵鐘○、同金ヶ崎町旧陸軍省軍馬補充部六原支部官舎第一棟▲、同金ヶ崎町旧陸軍省軍馬補充部六原支部官舎第二棟▲、同金ヶ崎町旧陸軍省軍馬補充部六原支部官舎第三棟▲

宮城県（1件）仙台市第2師団歩兵第4連隊兵舎○、

福島県（1件）西郷村旧軍馬補充部白川支部事務所○

関東 (68件)

茨城県（5件）阿見町霞ヶ浦海軍航空隊有蓋掩体壕○、同航空隊国旗掲揚塔○、同航空隊方位盤○、同航空

隊士官宿舎階段親柱○、笠間市筑波海軍航空隊司令部庁舎○

栃木県 (2件) 宇都宮市旧陸軍第66連隊倉庫▲、同那須塩原市乃木希典那須野旧宅○、

群馬県(5件) 高崎市元ロシア人兵士墓地○、渋川市赤城護国神社社殿○、みどり市防空監視哨跡○、長野原市防空監視哨跡○、玉村町玉村八幡宮末社国魂神社▲

埼玉県 (4件) 桶川市旧熊谷飛行学校桶川分教場建物(員数5)○、所沢市木村・徳田両中尉墜落地○、同航空発祥の地○、深谷市旧東京第2陸軍造幣廠深谷製造所給水塔▲、

千葉県 (10件) 千葉市旧鉄道聯隊材料廠煉瓦建築◎、市川市中村家住宅主屋他(鉄筋コンクリート防空壕)▲、習志野市旧鉄道第2聯隊表門▲、同旧陸軍演習場内圍壁▲、同館山市館山海軍航空隊赤山地下壕○、同南房総市大房岬要塞群(弾薬庫2棟・砲台跡・観測所、砲台跡2基、掩灯所、探照灯、格納庫、発電所、火薬庫、射的場、魚雷艇発進所)12件○、いすみ市特攻機「桜花四三乙型」行川基地跡○、松戸市旧陸軍工兵学校歩哨舎○、同旧陸軍工兵学校正門門柱○、山武市青い目の人形○

東京都 (18件) 千代田区近衛師団司令部庁舎●、板橋区庄磨機圧輪記念碑○、板橋区旧陸軍板橋火薬製造所●、豊島区鍋木久一旧軍事郵便文書△、同片野歌子家旧蔵配給切符・通帳類文書△、江東区竹橋事件処刑場○、同越中島練兵場跡○、同明治校碑○、同南砂戦災殉難者慰霊六地藏△、東大和市旧日立航空機変電所○、八王子市空襲記録写真原板○、東久留米市武蔵野鉄道引き込み線跡○、北多摩陸軍通信所跡○、武蔵村山市東京陸軍少年飛行兵学校跡地○、府中市陸軍調布飛行場白糸台掩体壕○、東村山市陸軍少年通信兵学校跡地○、小金井市陸軍技術研究所境界石杭△、福生市福生第一国民学校防空日誌(2点)△

神奈川県 (24件) 横須賀市東京湾第3海堡構造物(兵舎など4件)◎、同上下水道局走水水源地煉瓦造貯水池▲、同上下水道局水源地鉄筋コンクリート造浄水池▲、同上下水道局逸見浄水場ベンチュリーメーター一室▲、同上下水道局逸見浄水場配水池東入口▲、同上下水道局逸見浄水場配水池西入口▲、同上下水道局逸見浄水場暖速浄過調整室Ⅰ▲、同上下水道局逸見浄水場暖速浄過調整室Ⅱ▲、同上下水道局逸見浄水場暖速浄過調整室Ⅲ▲、同上下水道局逸見浄水場暖速浄過調整室Ⅳ▲、同横須賀重砲兵連隊営門◇、同逸見波止場衛門◇、同東京湾要塞猿島砲台●、同千代ヶ崎砲台●、相模原市旧陸軍通信学校将校集会所△、同集会所庭園△、同旧陸軍電信第1連隊電信神社碑及び奠営訓辞碑△、川崎市多摩区旧登戸研究所の遺構群◇、同中原地区陸軍用地境界標◇、同宮前区「おぼけ灯籠」◇、同中原地区海軍東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊境界標柱◇、同幸地区陸軍第101連隊(東部62部隊)関係名簿◇、同高津地区陸軍軍用地境界標◇、同海軍東京通信隊蟹ヶ谷分遣隊地下壕◇

中部(38件)

新潟県 (5件) 上越市旧師団長舎○、長岡市水道タンク▲、同旧中島浄水場ポンプ室棟▲、同旧中島浄水場監視室棟▲、同旧中島浄水場予備発電機室棟▲、

石川県 (8件) 金沢市旧陸軍第9師団司令部庁舎▲、同旧陸軍第9師団長官舎△、同旧金沢偕行社▲、同旧金沢陸軍兵器支廠第5号兵器庫●、同6号兵器庫●、同7号兵器庫●、内灘町着弾観測所跡○、射撃指揮所跡○

富山県 (3件) 南砺市立野原監的壕○、同吉江地区招魂社(旧吉江小学校奉安殿)▲、同旧大鋸屋小体育館(奉安殿)▲

福井県 (2件) 南越前町特務艦関東の遭難の碑○、福井市旧鶉小学校奉安殿▲

山梨県 (3件) 甲府市旧歩兵第49連隊糧秣庫▲、同南アルプス市ロタコ跡3号掩体壕○、「わだつみ平和文庫 中村徳郎・克郎資料」◇

長野県 (3件) 松川町元大島防空監視哨跡○、同松川町生田塩倉陸軍戦闘機墜落の地○、同松本市旧松本歩兵第50連隊糧秣庫▲

愛知県 (12件) 犬山市明治村旧名古屋衛戍病院◎、歩兵第6連隊兵舎▲、名古屋市乃木倉庫▲、豊橋市旧陸軍第15師団司令部庁舎▲、豊橋市旧陸軍第15師団長官舎○、豊川市豊川海軍工廠遺跡○、同市一宮町

砥鹿神社西参道石鳥居○、半田市旧中島飛行機半田製作所衣糧倉庫▲、尾張旭市旧旭兵器製造本社事務棟▲、瀬戸市法雲寺陶製梵鐘○、一宮市旧起第二尋常小学校奉安殿▲、知多郡美浜町第一河和海軍航空隊防空指揮所○

静岡県(2件) 静岡市禅叢寺本堂扁額△、静岡県浜松市凱旋記念門▲

近畿 (27件)

京都府(15) 京都市旧外務省東方文化研究所▲、同伏見区近鉄澱川橋梁▲、城陽市車塚古墳・掩体●、舞鶴市舞鶴旧鎮守府水道施設(7件を1構)●、同舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫●、同舞鶴海軍兵器廠予備艦兵器庫●、同舞鶴海軍兵器廠彈丸庫並小銃庫●、同舞鶴海軍兵器廠雜器庫並預兵器庫●、同舞鶴海軍兵器廠第3水雷庫●、同舞鶴海軍軍需品倉庫(電機庫)●、同舞鶴海軍軍需品倉庫(第1水雷庫)●、同舞鶴海軍軍需品倉庫(第2水雷庫)●、同北吸隧道▲、同神崎赤煉瓦ホフマン窯▲、同舞鶴鎮守府乙号官舎▲

大阪府(3件) 大阪市立美術館(旧高射砲第3師団司令部)▲、大阪市大阪城天守閣▲、

大阪市西成区北津守 久金属工業旧防空壕▲

兵庫県(1件) 姫路市立美術館(旧第10師団兵器庫)▲

三重県(5件) 鈴鹿市北伊勢陸軍飛行場掩体▲、四日市市誓元寺奉安殿▲、津市寒松院被災墓石○、明和町旧陸軍第7通信連隊128部隊防空壕○、同熊野市所山の英国人墓地○、

滋賀県(1件) 米原市機関車避難壕(2基)○

和歌山県(2件) 和歌山市旧加太砲台彈廠▲、同旧加太砲台厠▲

中国(25件)

鳥取県(1件) 境港市台場公園内慰霊塔○

島根県(2件) 浜田市立第一中学校屋内運動場(旧歩兵第21連隊雨覆練兵場)▲、島根県立浜田高校第二体育館(旧歩兵第21連隊雨覆練兵場)▲、

広島県(19件) 広島市原爆ドーム●、同広島陸軍糧秣支廠缶詰工場○、同日本銀行広島支店○、同旧広島地方气象台○、同広島城●、同旧広島高等学校講堂▲、呉市旧呉鎮守府司令長官官舎(和館)●、同(洋館)●、同海軍工廠時計○、同入船山記念館休憩所▲、同水道局宮原浄水場低区配水池▲、同水道局平原浄水場低区配水池▲、同水道局二河原水源地取入口▲、同本庄水源地堰堤水道施設●、同入船山記念館旧高島砲台火薬庫●、三原市旧大草尋常高等小学校奉安殿▲、世羅町旧大田尋常高等小学校奉安殿▲、江田島市旧江田島海軍下士兵卒集会所(海友舎)平屋建棟▲、同旧江田島海軍下士兵卒集会所(海友舎)二階建棟▲

岡山県(3件) 岡山市岡山大学情報展示室(旧陸軍17師団司令部衛所)▲、同岡山県総合グランドクラブ(旧偕行社)▲、瀬戸内市邑久(おく)光明園奉安殿▲

四国(15)

徳島県(6件) 鳴門市板東俘虜収容所跡●、同板東俘虜収容所安芸家バラック▲、同板東俘虜収容所柿本家バラック▲、同ドイツ橋◎、ドイツ兵慰霊碑◎、同板東俘虜収容所関係資料◎

香川県(3件) 善通寺市旧善通寺偕行社●、同旧陸軍第11師団兵舎棟▲、同多度津町JR多度津工場会食所1号▲

愛媛県(3件) 松山市掩体壕○、同大宝寺●、伊方町旧正野谷栈橋(軍艦波止場)▲

高知県(3件) 南国市前浜掩体群(7基)○、高知市織田齒科堀▲、香南市野市町東佐古 鬼ヶ岩屋洞穴遺跡○

九州(92件)

大分県(18件) 宇佐市城井1号掩体○、宇佐海軍航空隊落下傘整備所○、宇佐海軍航空隊半地下式コンクリート建物○、宇佐海軍航空隊関係爆弾池○、高居地下壕○、宇佐海軍航空隊発動機試運転場○、宇佐海軍航空隊関係連光寺生き残り門△、宇佐海軍航空隊忠魂碑△、宇佐海軍航空隊関係柳田清雄顕彰碑△、宇

佐海軍航空隊関係旧三洲国民学校コンクリート塀△、宇佐海軍航空隊正門門柱△、佐伯市旧佐伯海軍航空隊掩体壕▲、同丹賀砲台跡（豊予要塞）○、同仙崎砲台跡（豊予要塞）○、同西南戦役古戦場陸地峠○、同西南の役津島畑古戦場○、玖珠町豊後森林機関庫▲、同豊後森林機関庫転車台▲

福岡県（4 件） 行橋市稲童 1 号掩体壕○、志面町旧志面鉱業所堅坑櫓●、須恵町旧海軍燃料燐採炭部新原採炭本部跡○、大牟田市役所本庁舎旧館▲

長崎県（13 件） 長崎市大浦天主堂●、同山王神社の大クス○、長崎原爆遺跡旧山城国民学校校舎●、同浦上天主堂旧鐘楼●、同旧長崎医科大学門柱●、同山王神社二の鳥居●、同爆心地●、長崎県島原市からゆき塔女のドーム○、佐世保市旧佐世保鎮守府武庫預兵器庫▲、旧佐世保鎮守府凱旋記念館▲、佐世保重工業 250 トン起重機▲、旧佐世保無線通信所施設（針尾送信所）●、大村市第 21 海軍航空廠本部防空壕○、

佐賀県（1 件） 佐賀市三重津海軍所●

熊本県（13 件） あさぎり町神殿原秘匿飛行場掩体壕△、熊本県西南戦争遺跡●、熊本市明德官軍墓地◎、同七本官軍墓地◎、同花崗山陸軍埋葬地○、同旧輜重兵 6 連隊衛兵所○、熊本県玉東町有栖川の宮監戦の地○、同篠原国幹戦傷の地○、同南関町城ノ原官軍墓地◎、同肥猪町官軍墓地○、同水俣市陣内官軍墓地◎、同和水町下岩官軍墓地◎、同菊池市花房飛行場給水塔○

鹿児島県（23 件） 薩摩川内市天狗鼻海軍望楼台○、始良町山田の凱旋門▲、南九州市旧知覧飛行場給水塔○、同旧知覧飛行場油脂庫○、知覧特攻戦没者の手記（18 点）○、なでしこ隊「特攻日記」○、同旧陸軍知覧飛行場弾薬庫▲、同旧陸軍知覧飛行場着陸訓練施設鎮礎▲、同旧陸軍知覧飛行場防火水槽▲、同旧陸軍四式戦闘機「疾風」（1446 号機）○、鹿屋市海軍航空隊笠野原基地跡の川東掩体壕○、同海軍航空隊串良基地跡の地下壕電信壕電信司令室○、大和村今里小中学校旧奉安殿▲、伊仙町鹿浦小学校奉安殿▲、瀬戸内町旧木慈小学校奉安殿▲、同須子茂小学校奉安殿▲、同薩川小学校奉安殿▲、同池地小中学校旧奉安殿▲、同節子小中学校旧奉安殿▲、同古仁屋小学校旧奉安殿▲、志布志市権現島水際陣地跡○、同西馬場の岩川海軍航空隊基地通信壕跡○、同平床の通信壕跡○

沖縄県（20 件） 伊江村公益質屋○、南風原町沖縄陸軍病院南風原壕○、中城村 161.8 高地陣地○、読谷村座喜味掩体壕○、読谷村座喜味忠魂碑○、同チビチリガマ○、うるま市新川・クボウグスク陣地壕群○、同平敷屋製糖工場跡○、宜野座村米軍野戦病院集団埋葬地収骨報告書○、本部町本部監視哨跡○、渡嘉敷村旧日本軍特攻艇秘匿壕○、渡嘉敷村集団自決跡地○、渡嘉敷村赤松隊本部壕○、宮古島市ヌーザランミ海軍特攻艇格納秘匿壕○、同佐事川嶺凝灰岩層及佐事川の陣地壕○、石垣市名蔵白水の戦争遺跡群○、石垣市元海底電線陸揚室○、同登野城尋常高等小学校奉安殿○、沖縄市美里国民学校奉安殿○、同美里小学校忠魂碑○

(2)指定・登録文化財の動向

今回新たに文化財に指定登録されたものが 6 件、過去に指定・登録されながら記載できずに漏れていたものが 7 件あり、合計 319 件になりました。新たに指定されたものは市町村史跡 3 件、同有形文化財 1 件、国登録文化財 2 件の計 6 件です。内訳は史跡：愛知県美浜町第一河和海軍航空隊指揮所、宇佐市の宇佐海軍航空隊発動機試運転場、沖縄県宮古島市の佐事川凝灰岩層佐事かわの陣地壕、有形文化財：南九州市旧陸軍四式戦闘機「疾風」（1446 号機）、国登録文化財：

広島県江田島市の旧江田島海軍下士官兵卒集会所平屋棟・同二階棟です。

記載漏れは宇佐市の市登録文化財に宇佐海軍航空隊忠魂碑など 4 件（いずれも 2016 年に登録）、南九州市史跡の旧知覧飛行場油脂庫、同市有形文化に知覧特攻戦没者の手記・なでしこ隊「特攻日記」（いずれも 2015 年指定） 3 件の計 7 件です。

文化財の種類では市町村指定が 141 件と最も多く、ついで国登録文化財が 94 件となっています。過去 3 年間は国・県の指定がありません。地域別では九州が 92 点と最大で県別では神奈川県が 42 件、次いで鹿児島県 23 件、沖縄県 20 件となっています。

5 まとめ

今年も8月15日を前後してテレビでは「戦争特集番組」が数多く組まれました。新たな資料の発掘や証言などに基づき詳細な調査・研究が行われ新たな事実が明らかとなり、戦争の理不尽さも伝わってきました。しかし最も大事なことが大きく欠如しているように思えてなりません。それは戦争の加害の側面、日清戦争以来50年余りにわたって繰り返された一連の戦争とはどんな性格の戦争であったのか。日本軍によって塗炭の苦しみと恐怖に陥れられ、殺戮された東アジアの人々の耐え難い痛みを共有し記憶するという最も重要な視点が欠如しているのではないかということです。

戦争についての日本人の記憶が、一連の戦争の最後の一年に被った被害の側面が強調されることによって侵略戦争という戦争の本質が忘却・消去された記憶、被害者としての記憶だけが蓄積され、加害の歴史に無自覚な日本人をつくることになるのではないかと危惧します。

戦没者追悼式に臨み菅首相は「積極的平和主義の旗の下、世界の課題解決に全力で取り組む」と述べました。加害や戦争責任には触れず、不戦の誓い・反省の言葉もありませんでした。このような中で教科書問題や世界遺産の展示に見られる事実の隠蔽、戦争や戦争遺跡から加害の記憶を消去しようとする動きも起こっているのです。過去に指摘してきたように戦争遺跡の位置付けや説明板についても同じことが言えるのではないのでしょうか。

しかしこんなことがいつまでも通用するはずはありません。先に述べたように侵略戦争や植民地支配が不正義であることはもはや世界の大勢となっています。かつての宗主国が数百年の過去に遡って植民地主義を謝罪・反省、補償を行い、略奪物を返還しています。そしてともに未来を切り開こうという動きが見られるようになりました。

戦争遺跡は日本が日清戦争以来50年余りにわたって繰り返してきた侵略戦争の「証」となるものです。どんな小さな戦争遺跡でも国内で完結するものではありません。戦争遺跡が何故作られたのか、作られた時代、使われた時代は、東アジアの人々にとってどんな時代であったのか戦争遺跡の前に立って想像力を働かせる必要があると思います。そのことによって戦争遺跡を東アジアの近代史の中に位置付けることを可能にし、戦争遺跡の歴史的価値を高めることができると思います。これは被害の立場からは見えてこない、加害の立場に立って初めて得ることができる歴史認識であると思います。

今、いくつもの重要な戦争遺跡の保存問題が起こっています。これは決して偶然ではなく、戦後76年を経て戦争遺跡そのものが限界に来ていることを示していると思います。しかし経年劣化の問題だけではなく、戦後社会が戦争とどう向き合ってきたのかという「証」でもあると思います。本来ならばこれらの戦争遺跡は、戦争の反省に立って、教訓を学び、反戦平和を誓う記念物として次世代に継承する存在であってしかるべき戦争遺跡です。76年の間に世界の歴史や歴史に対する見方は大きく変化しました。日本のみが思考停止に陥っていることは許されません。これらの遺跡の保存問題は、どんな未来社会を選択するか、という問題であると思います。東アジアの人々と共有することのできる歴史像を構築していくために、或いは和解の場として、次世代に歴史のバトンを渡せる場とするためにも保存を実現しなければなりません。

最近の戦争遺跡関連論文、報告書、図書

宮古市教育委員会 2021『宮古市内の戦争遺跡』

空襲・戦災を記録する会全国連絡会議 2021『空襲通信』第23号

戦後史会議・松江 2021『島根の戦争遺跡 満州事変、日中戦争、アジア太平洋戦争期の松江市・出雲市・雲南市』

高谷和生 2020『くまもとの戦争遺産-戦後75年平和を祈って-』熊日出版

花田勝広 2020『北部九州の軍事遺跡と戦争資料 宗像沖ノ島砲台と本土決戦』サンライズ出版

福岡県教育委員会 2020『福岡県の戦争遺跡 福岡県文化財調査報告書 第274集』

秋田県戦争遺跡研究会編 2020『秋田県の戦争遺跡』秋田文化出版

高塚久司 2020『島根県における空襲とその時代』

空襲・戦災を記録する会全国連絡会議 2020『空襲通信』第22号

武蔵野の森公園事業用地内で発見されたプロペラに係る調査検討委員会 2020
『武蔵野の森公園事業用地内で発見されたプロペラに係る調査検討報告書』

宮古市教育委員会 2019『宮古市内戦争遺跡分布報告書(2)下地地区・伊良部地区』

池田榮史 2019『沖縄戦の発掘 沖縄陸軍病院南風原壕群』新泉社

安部和城 2019『小倉城御用屋敷跡』北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室

瀬戸哲也 他 2019『神山古集落』沖縄県立埋蔵文化財センター

原田弓子 2019『第56震洋特攻隊と剣先砲台-原田弓子の遺言写真集-』貝山地下壕保存する会

福田鉄文 2019『私たちの町でも戦争があった-アジア太平洋戦争と日向市』宮崎文庫

空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会実行委員会 2019『第5回空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会報告集』

工藤洋三「VT信管付き260ポンド破碎爆弾と6月8日の鹿屋空襲」

織田祐輔「1945年3月28日～29日の南九州に対する艦載機空襲について」

草場啓一「西鉄筑紫野駅銃撃事件の概要」

藤木雄二「利用か？解体か？岐路に立つ“戦争遺跡”大牟田市庁舎本館」

前園廣幸「下関要塞（北九州市域）の現状」

相戸 力「旧陸軍第2総軍第16方面軍司令部山家地下壕建設問題」

齋父雅文「玉名飛行場・大型格納庫の基礎遺構調査」

小川泰樹「福岡県戦争遺跡調査」

高谷和生「建軍飛行場と有蓋木製覆屋掩体壕」

中嶋光秋「大牟田の空襲を記録する会・最近の主な会活動報告」

滋賀県平和祈念館・滋賀県立大学中井研究室 2018『滋賀県戦争遺跡分布調査報告書』

宮古市教育委員会 2018『宮古市内戦争遺跡分布報告書(2)下地地区・伊良部地区』

宮古島市教育委員会 2018『宮古島市内戦争遺跡分布調査報告書（1）-城辺地区・上野地区-』

米子市文化財団 2018『金廻芦谷平遺跡・越敷山古墳群（金廻地区）』

地域報告 1

多摩地域の戦争遺跡

齊藤 勉 東京東大和大会実行委員
(浅川地下壕の保存をすすめる会事務局長)

《発言録》

ただいまご紹介頂きました浅川地下壕の保存をすすめる会の齊藤といいます。それでは画面の共有をさせていただきます。

多摩地区について

多摩地区はどのような地域かを説明させていただきます。多摩地区は東京都西部の市町村部をいいます。昔は南多摩郡、西多摩郡、北多摩郡を合わせた地域で、三多摩ともいいました。明治の途中までは神奈川県でしたが、128年前の1893年、明治26年に東京都に移管されました。人口は422万人で、東京都の3分の1弱、全国の都道府県にすると10位ぐらいの規模です。戦前の人口は4,500万人でして、1世紀前に比べれば10倍近くに増えたと言えます。市町村の面積はさまざまで大会の地である東大和市は小さく、市の東端から西に1時間ほど歩くと西端にたどり着きます。

多摩の産業は全国規模で10位ぐらいで、全国平均を超えており、大学も44校あります。市町村域の枠をこえて多摩地区として団体がまとまることがあります。たとえば多摩信用金庫は企業メセナとして公益財団法人たましん地域文化財団を設立し、歴史資料室を開設し、季刊郷土誌『多摩のあゆみ』を発行しています。全国的にも非常にめずらしいです。行政では平和事業において多摩の26市が情報共有と調査研究のため協議会を作り、記念誌まで発行しました。大学としての取り組みとしては、中央大学総合政策学部松野良一ゼミの学生が「多摩探検隊」というケーブルテレビ番組を配信し、空襲や戦争遺跡も扱ってきました。こういうところが多摩地区です。

昭和10年代の多摩地区の変化

多摩地区を理解していただくためには、どうしても昭和10年代の多摩を理解して頂く必要があります。

多摩地区は区部と違い、八王子市街地や中央線沿線、街道沿いの小さな市街地を除けば農山村と山林でした。それが昭和10年代に中央線沿線を中心に軍需産業、特に飛行機産業が急速に成長します。多摩はがらっとかわります。もともと昭和一ケタの時代に石川島飛行機、のちの立川飛行機が大正時代に開設した立川陸軍飛行場に隣接して設立されたのですが、立川が飛行場を中心に発展し「空都立川」、あるいは「軍都立川」が形成されると、他の町村もわれもわれもと軍事施設、軍需工場の誘致に乗り出したのです。昭和10年代、日中戦争が始まる頃には中島飛行機武蔵野製作所、後に従業員など4万5000人の東洋一のエンジン工場ができます。同じ頃、東京瓦斯電気工業、のちの日立航空機が、さらに昭和飛行機が設立されました。これらを私はかつて多摩の「4大航空機メーカー」と呼びましたが、それぞれに1万人以上の従業員を誇る軍需工場でした。

それに加えて立川駅からの青梅線沿線に、陸軍航空工場の立川飛行場に隣接してできました。ここも従業員が1万人以上いました。そのほか、軍関係の学校、研究所、関連の中小工場もでき、これらを米軍は航空写真で確認するわけです。従って昭和10年代の多

摩の軍需産業の新設による軍需工業地域としての発展、軍関係施設の設置なくして空襲、戦争遺跡は語れません。

その一方で没落したのは民需産業、とくに織物業で、地域では織物業で栄えた八王子です。八王子は軍需工場で働く労働者の供給地になり、それが空襲を受けた理由のひとつになりました。さらに1944年以降は疎開地域になります。

ちなみに戦後、このような多摩の軍需工場の施設、敷地は、立川飛行機や昭和飛行機のように今でも後継会社があって、施設・敷地を何らかの形で使っていたり、軍事施設でも横田基地や調布飛行場のように飛行場として、あるいは自衛隊府中基地のように自衛隊が使用しているところがあります。そこには調布飛行場周辺の掩体壕のように戦争遺跡や当時のままの施設が残っていたりします。ただ、多くは中島飛行機武蔵製作所や陸軍航空廠、陸軍航空工廠のように米軍に使われたあと公園などになったり、公営住宅など公共施設が作られたりしています。また、大学、高校、その他の校種の学校など教育施設の敷地になったところもあります。いわば戦後の多摩地区の発展で欠かせない公共空間がこれらによって提供された、ということもできます。

空襲では武蔵野町にあった中島飛行機武蔵製作所が、1944年11月24日に本格的本土空襲として最初の空襲をうけました。4月からは日立航空機などが、八王子は中小都市空襲として焼夷弾による空襲をうけました。小型機空襲は2月から始まり、日立航空機の変電所にもそのあとが残っています。

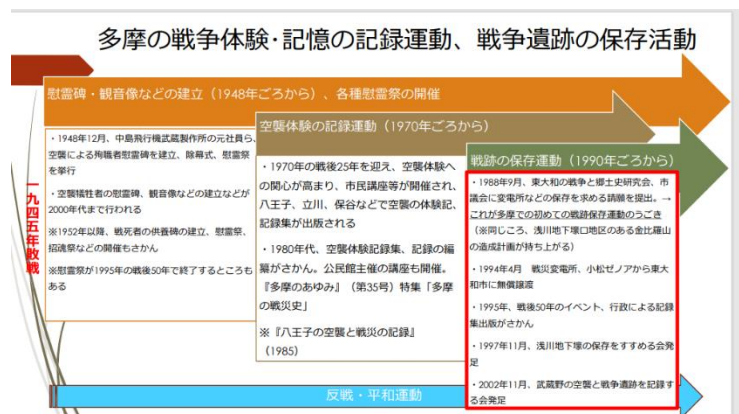
忠魂碑は町村ごとに残っていますが、例外的に日野市、町田市は町村合併により一カ所に集めています。戦後は基本的には忠魂碑に並ぶかたちで慰霊碑が、個人や団体が平和観音が建立されたところもあります。

行政の戦争遺跡の保存については市町村ごとに差があり、前向きなのは東大和市で、八王子市は後ろ向きだと思います。

戦争の惨禍を刻み、体験を伝える戦後の動き—3つの波

こうした空襲をはじめ戦争の惨禍に市民が戦後にどのように向き合おうとしたのかといいますと、四半世紀ごとに3つの時期があると思います。まず、敗戦直後から戦災死没者の供養塔や慰霊塔を建立して、慰霊祭をはじめめる時期です。それから約25年たった1970年ごろから空襲体験の記録運動が始まります。中島飛行機武蔵製作所の周辺で空襲を受けた保谷市や田無市、現在の西東京市ですが、さらに立川市、八王子市で体験記録集が出版されます。ただ、あくまで体験を残し伝えようというのがこの運動の目的でした。戦争遺跡も調べていますが、保存をしようという運動にはなっていません。

戦後50年になるころから戦争遺跡への関心が高まり、保存への動きはまず東大和市で始まりました。同じころ、浅川地下壕でもイ・ロ・ハの3地区にある壕のうち、ロ地区のある金比羅山を崩して学校作ろうという計画が問題になり、反対の動きが起きました。東大和で変電所の保存が具体化するなかで1995年の戦後50年を迎えます。行政も戦後50年の各種のイベントを開催し、戦争体験記録集が出版されます。浅川地下壕の保存を



すすめる会も 1997 年の 11 月に結成されます。

多摩地区の戦争遺跡

こうしたことを踏まえた上で多摩地区の戦争遺跡を紹介したいと思います。

まず、建物で大きなものはありません。しいてあげれば、現在も使われているのは立川飛行機の格納庫です。4大航空機メーカーの中で唯一、当初の建物が現在も使われています。現在は立飛ホールディングスが所有し、これは多摩モノレールから撮影したもので

す。この写真の扉の部分の注意してもらえればわかるのですが、建物の外まで扉が開きます。立川は物流の拠点になっており、各会社がここを倉庫として借りています。中から施設を見たかったのですが、断られてしまいました。こちらの写真では鉄骨にリベット打ちがみられます。ここには給水塔が残り、入る機会がありました。ただ、機銃掃射などの痕を見つけることはできませんでした。東大和では戦災変電所は給水塔とセットで残そうとしたのですが、給水塔は壊されてしまいました。

このあとの多摩の戦跡ですが、どうしても八王子が中心となりますのでご了解下さい。中小地方都市として空襲を受け、市街地の約 80%を焼失したためです。

まず、これは国道 20 号、いわゆる甲州街道の浅川にかかる大和田の橋の歩道に残された焼夷弾 M50 がえぐったあとです。歩道を修繕する時に撤去しようとしたらしいのですが、たまたま通りかかった事情を知っている方が止めてくれと談判しました。橋の両側にこのような形でここに落ちましたよという形で残し、他は茶色のタイルで落ちた場所を示しました。全国的にみてもめずらしいです。この写真は八王子の山間部にある乾農寺という寺の山門です。本堂が焼けた時に類焼したあとが残っています。ここまで焼け跡が残っている建物は市内にないものですから、八王子の戦跡を案内するときには必ずここによります。この写真は甲州街道の戦災樹木です。浅草の浅草寺にもありますが、街道沿いに 20 数本あるのは、全国的にみても非常にめずらしいと思います。

左は相即寺地蔵堂にある通称、ランドセル地蔵です。品川区から学童集団疎開していた神尾明治君が 7 月 6 日の P51 による機銃掃射で亡くなり、嘆き悲しんだお母さんが明治君のランドセルを面影が似ている地蔵に背負わせました。現物です。76 年間ここに 있습니다。年 3 回、公開しています。これを戦争遺跡ということが出来るのか、という声もあるかもしれませんが、童話作家・古世古和子さんの童話『ランドセルをしょった地蔵さん』で広く知られ、市内の小学校でも使われる教材になっています。われわれはここを戦争遺跡

敗戦までの大型構造物：物流倉庫として使用中の立川飛行機の格納庫

飛行機の格納庫



中小地方都市空襲を受けた八王子の戦争遺跡

甲州街道の大和田橋の歩道に残る焼夷弾痕



空襲



焼け跡の残る山門（乾農寺山門）



甲州街道の戦災樹木

爆弾坑・銃弾痕

相即寺地蔵堂のランドセル地蔵（八王子市泉町）



機銃掃射の銃弾痕（JR中央線高尾駅1.2番線ホーム）

空襲



200kg爆弾の爆弾坑（八王子市大目町）

として案内しています。

真ん中上の写真は小型機の銃撃による銃弾痕です。JR 中央線の高尾駅の 1、2 番線の屋根を支える柱、明治時代に使われた線路を利用していますが、ここに空いています。その威力がわかります。

下は 250 kg 爆弾の爆弾坑です。普通は爆弾が落とされて穴があいてもすぐに埋められていて残っていません。八王子の場合は、1945 年 4 月 4 日に立川飛行機を空襲の目標に飛来した B29 が山の中に投下し、それが埋められずに十数個残っています。家一軒が吹っ飛ばすような穴です。東京で確認されているのは一応ここだけです。

次に日本とアメリカの軍用機の墜落場所です。左の写真は 4 月 4 日、青梅市柚木に墜落した B29 の墜落場所です。立っている人の前がくぼんでいます。一帯の地面には小さな破片が残り、現在でもその破片を拾い上げることができます。下は追悼碑です。真ん中は同じ日に東村山市秋津に墜落した場所に建てられた平和観音像です。爆弾を積んだままで墜落し爆発したらしく、深さが 10 メートルぐらいあったそうです。ちなみに戦災死者、戦死関係の平和観音像は、多摩地区にいくつかあります。



右の写真の木柱は高さ 70 cm ぐらいで、2 月 17 日に艦載機との空中戦で撃墜されたゼロ戦が墜落した場所に、地元の方がたてて供養しました。当時のものですが、書かれていたという文字を見ることはできません。

浅川地下壕は高尾山の手前、JR 高尾駅南口から歩いて 10 分ほどのところ、全部で 3 カ所にあります。基本の断面は幅 4 メートル、高さ 3 メートル、総延長約 10 キロメートル、東京都では最大の地下施設です。東京都の戦争遺跡として大きなものは地上では東大和の戦災変電所、調布飛行場の掩体壕などがありますが、地下は浅川地下壕です。その他の地下壕の多くが確認できなくなりました。浅川地下壕の工事は陸軍東部軍が 1944 年 9 月に「浅川倉庫新設工事」として発注し始めました。年末頃に中島飛行機武蔵製作所の地下工場にすることになりました。工事のうち 2 カ所は佐藤工業、残りは大倉土木（現・大成建設）が担当しました。掘削に従事したのは約 500 人（妻子を含めて 1500 人）と独身の約 100 人の朝鮮人労働者でした。1944 年秋、静岡県熱海にあった国鉄のいわゆるトンネル学校の 10 代半ばの生徒も掘削に参加しますが、この写真はその生徒がとった写真です。壕から掘り出した岩石をズリといい、それが白く出ているのがわかります。真ん中の写真は、1945 年 9 月 14 日にアメリカ陸軍通信隊が撮影しました。右側は平成の末ごろ、急傾斜地の崩落防止工事の際に現れた地下壕の



中央本線419列車空襲

1945年8月5日（日）昼ごろ、新宿発長野行き中央本線419列車が、高尾山の北側にある蓮の花トンネル東側出入口で、硫黄島から飛来したP51、4機の銃撃を受けた空襲。52名が死亡、133名が負傷、単独の列車に対する銃撃空襲としては日本で最大級の犠牲者となった。毎年、慰霊の集いを開催。



入り口の様子です。

それから八王子では敗戦直前の8月5日に、中央本線湯の花トンネル419列車空襲という列車空襲がありました。新宿発長野行き列車が米陸軍の戦闘機P51の銃撃を受け、乗客52名が亡くなり133名が負傷する日本で最大級の被害者を出しました。当時のまま使われているトンネルが真ん中下で、その上は慰霊の碑、右側は乗客として乗っていた毎日新聞記者の森正蔵が日記に記していた銃撃時の鳥瞰図です。

次は忠魂碑、慰霊碑を紹介します。戦後の慰霊碑は戦争遺跡ではないという声もあります。

まず、左側は戦後の1959年に建立された砂川町（現・立川市）の高さ7.7メートルの慰霊碑です。なぜこれを取り上げたのかといいますと、砂川闘争が起きた数年後に砂川町が多摩地区最大級のこの碑を建立したからです。宮城県から仙台石を船で運んできて、横田基地から米軍のトレーラーを借りてここまで運んできたという説明板には書いてあります。碑がある場所は阿豆佐味天神社とあって、砂川事件の際には町民たちの終結場所となったところです。ここに日露戦争の碑とともにあることを考えたいです。



それから右側の2枚は恩方村（現・八王子市）の忠魂碑です。忠魂碑は碑だけを注目がちですが、それが立っている場所、空間にも目を向けたいものです。寺社や学校脇が多いのですが、恩方村の忠魂碑はいわゆる招魂場に立っています。手前の広場は1952年の独立後以降も招魂祭がおこなわれ、広場の忠魂碑側には一列に英霊墓の建立や遺族会、招魂祭の運営、村のために尽くした人の碑を建立しています。招魂場という空間に注目したいと思っています。

次にこれもあまり注目されていませんが、いわゆる英霊墓です。英霊墓の多くは戒名ではなく陸海軍の階級、位階勲等と氏名が刻まれています。墓の形態は大きくわけて3つあります。3枚のうち左側は日露戦争での戦死者の墓で、一般的な墓石ですが、竿石の下の方に「忠勇士」とあります。真ん中は板碑形式で、日中戦争直前の戦死者の墓です。立っている若者の身長は178cmあり、墓石が高いものであることがわかります。氏名の左脇の白いところには、写真が埋め込まれていたと推定されます。右側は日中戦争で戦死した方のもので、この四角錐形式は英霊墓の典型です。こういった大きな墓が建立されたのは、1937年の日中戦争開始から1940年ごろまでです。土台を含めると高さ2メートル近いものが多いです。建立された背景や、刻まれている戦歴などを読み解いて、地域から出征した兵士の戦死から戦争の実態を読み取ることができると考えています。



最後になりますが、多摩の運動の課題・問題点などを取り上げます。まず、どこでも同じだと思いますが、団体会員の高齢化、担い手不足が大きいと思います。担い手を少しでも増やしたいです。2つ目には戦跡の劣化や消失です。典型は戦災樹木で、寿命がくれば枯れます。八王子には樹皮一枚で残っている木がありますし、1990年代に枯れて

しまった戦災樹木を切り取って本堂の脇に「展示」している寺院があります。地下壕は宅地開発と自然に埋まりなくなりました。粘土層の地下壕の場合、安全管理の問題があり、なかなか大変です。

さらに行政の取り組みの温度差です。東大和市は市の平和のシンボルとして変電所を残しましたが、八王子市は現代のモノの保存には後ろ向きで、市で独自に掲げた戦争遺跡に関する掲示板などはありません。及び腰です。私が事務局長をしている浅川地下壕の保存をすすめる会も、浅川地下壕の保存と公開を行政に実現させることを目的に結成されましたが、実現していません。行政がこうですから、継承の方法を多様に作り出していくこと、それも課題です。戦争遺跡がないから戦争を伝えられないのかというと、そうではないと思います。興味深い例としては、仙台・空襲研究会は米軍が仙台を空襲する際の中心点を示す「仙台空襲を記録する場」というプレートを、中心点近くの民間のビルの壁面に設置しました。モニュメントの設置というのも、戦争を伝える大事な取り組みではないかと思います。

これで終わりにさせていただきます。ご視聴ありがとうございました。

地域発表 2

大規模修繕後の旧日立航空機変電所

後 藤 祥 夫 東京東大和大会実行委員
(東大和・戦災変電所を保存する会)

「旧日立航空機立川工場変電所」の概要

東京都東大和市の南西部、都立東大和南公園の一角に変電所がある。

鉄筋コンクリート2階建て(高さ9.14m、間口18.62m、奥行9.48m)の建物で、南面を中心に夥しい数の機銃掃射痕を残す。

厳密にはこの建物の北側にあった変電設備(保存は叶わず)で変電した(66,000Vの高電圧を3,300Vの動力用と、110Vの照明、コンセント等にする低電圧)電源を工場内に送る「配電」設備であった。

軍需工場建設の経緯

① 地理的な特性から

多摩地域に多くの軍関係施設、軍需工場が建設されたのは、当時広大な土地(ほとんどは農地)が多く存在したこと。とりわけ多摩川流域以北の「北多摩地域」は、平坦な土地が広がっていて、飛行場や軍需工場を建設するのに適していた。

② 社会的な背景から

世界金融恐慌に端を発した「昭和恐慌」により、地方の農村は大きな打撃を受けた。農業以外に経済活動の手段を持たない当時の東京府北多摩郡大和村も大きな打撃を受け、経済更生村に指定された。村は新たな産業の導入を模索していた。

③ 軍需産業側の都合

当時大和村南部はほぼ無人の土地で、その農地、荒蕪地に目をつけたのは「東京瓦斯(ガス)電気工業株式会社」であった。ガス器具の生産に端を発し、のちには電気器具も主要な生産品とし、その後は自動車や飛行機、兵器の生産にも手を広げた大企業で、現在の大田区(当時大森区)大森にあった工場の一部をここに移転し、飛行機のエンジンを生産する工場と社宅を建設して、徐々に規模を拡大していった。

これらの動きには工場のあった大森一帯に工場が林立するようになり、生産拡大が望めなかったため、軍国化を進める国の後押しを得て進められたことは当然である。また一説には人口集中により大森周辺の生活環境が悪化し、全国から集まる若者に与える影響が大きく、生産性の向上の障害となっていたためとも言われている。

④ 工場建設年とその後の変遷

工場の建設は1937年(昭和12年)に具体化し、翌年には建設が始まっている。ただし、変電所内に残る配電盤(明電舎製)のプレートには「1939」(昭和14年)

の刻印があり、工場建設の最初期に造られたと考えられる変電所が、実際に稼働し始めたのはいつからなのか、今後も分析を行う必要がある。

東京瓦斯電気工業株式会社は、1939年に日立製作所傘下の企業として部門別に分社化し、航空機部門は「日立航空機株式会社」となった。大和村にありながら「立川工場」と呼んだのは、建設当時、工場一帯の南を流れる玉川上水をはさんで、砂川村（1963年立川市に編入）と立川町（1940年には市制施行）が接しており、全国的にも名のおおる地名を工場名として付したものである。なお、この工場を「日立航空機株式会社立川発動機製作所」と呼ぶ場合もあった。

当時の大和村は、北部に広がる狭山丘陵周辺に集落があったが、南部はほぼ無人であり、用地面積約97万㎡の工場と共に社宅の建設も一気に進んだ。最盛期にはおよそ1万4千人の従業員を擁する同社最大のエンジン製造工場となり、1944年には年間2,250台まで増産し、同社のエンジン生産の半数を占めるまでとなった（生産エンジン ハ12、ハ13、ハ13甲、ハ26、ハ42、ハ112）。

大和村の人口も建設が始まった1938年（1月1日付）には6千人足らずであったが、終戦時の1945年には1万6千人（同）を超えている。

工場への空襲

1944年の太平洋地域での日本の占領地陥落以降、日本への空襲が本格化した。立川市歴史民俗資料館長などを務めた小沢長治（ながはる）氏が市町村ごとに空襲の日付をまとめた『多摩の空襲と戦災～50年前、ここは戦場だった』（けやきブックレット けやき出版 1995年5月）では、現在の東大和市内には1945年1月から6月まで10回の空襲があったとしている。ただし、これは北部にある村山貯水池などへの空襲を含むもので、工場への犠牲者を伴う空襲は3回あった。

なお、空襲機の種類や機数は、戦後の工場変遷の大部分の時期を担った「コマツゼノア株式会社」の社史資料や社報（以下「社史」と表記）と、当時、立川市にあった「立川飛行機株式会社」に勤務していた澤田隆次（たかじ）氏（1907年生まれ 大和村狭山在住）が記録していた『空襲日誌』（東大和市立郷土博物館に原本保管 以下「日誌」と表記）に日立航空機の被害のようすも記されているので、これらを表記した。なお、これらはいずれも地上からの目視による確認であり、工藤洋三氏らがアメリカ国立公文書館で調査した南方の基地や艦上から発進した種類や機数のデータとは食い違いがあることを付記しておく。

① 1945年2月17日（土）

1945年2月の関東地区空襲（ジャンボリー作戦）のひとつとして、日立航空機立川工場にも大規模な空襲があった。その空襲時間は午前10時35分からわずか7分間であった（日誌）。社史によればグラマン（F6F）50機、日誌によればグラマン及びカーチス（機数の記載なし）が飛来し、78人の犠牲者を出した。

また、アメリカ側の資料では3人乗りの艦載機アベンジャーによる爆撃も記録されており、同機が500ポンド爆弾を投下する画像が残されている。

② 1945年4月19日（木）

午前10時02分から11時16分まで空襲警報発令（日誌）。P-51約30機が立川飛行機株式会社を空襲（日誌）。一方日立航空機立川工場には「P-51 Mustang（マスタング）5機」が日立航空機立川工場を空襲（社史 立川飛行機への空襲機の一部が来襲か）。なお、変電所の機銃掃射痕はこの時のものとする説もある。社史では犠牲者5人とするが、7人の死亡を示す資料もある。

③ 1945年4月24日（火）

午前8時47分から27分間の空襲（日誌）で、B-29爆撃機101機編隊（社史、日誌では120機編隊）により、工場の8割が壊滅した。28人が犠牲となった。

なお、3回の空襲はいずれも隣接する社宅群へも及び、家族に犠牲者（なかには3歳の幼児も）が出たほか、徴用されていた学生にも多くの犠牲者が出ている。

戦後の工場の歴史と変電所

戦後は「平和産業に限り」という条件のもと、軍需工場用地の一部を使って新たな会社が操業を始めた。変電所はその機能を失うことなく、これらの工場へ電気を送ることとなった。

日興工業株式会社 1946年6月19日～ 鍋、釜、空気ポンプなど製造
東京瓦斯電気工業株式会社（新瓦斯電） 1949年8月31日～

日興工業時代の生産品に加え、排水用ポンプ、2馬力発電機など製造
富士自動車株式会社（富士重工とは無関係） 1953年5月1日～

ガスデンFMCオートバイ、軽自動車フジキャビンなど製造
ゼノア株式会社 1973年1月1日～

エンジン各種、刈払機、チェーンソーなど製造
コマツゼノア株式会社 1979年10月1日～

ゼノア時代の生産品に加え、小型パワーショベル、電子ビーム溶接機など製造

その後、コマツゼノア株式会社は順次埼玉県川越市に移転することとなり、2000年8月に移転を完了している。

この間、変電所内部の機器は多くが時代にあわせて取り換えられたが、建物の外観は戦時下の空襲の痕跡をほぼ残したまま稼働した。

米軍大和基地の開設

戦後の企業が操業していた一帯を除く旧軍需工場の土地はアメリカ軍に接収されることとなった。この基地はのちに「米軍大和基地」と呼称されることになるが、その機能は米軍立川基地の拡張（砂川闘争の発端となったもの）に伴う、兵士3千人の宿舎やハイスクール、運動施設を備えたものであった。土地の提供が当時の大和村の意向を無視して国家間で決められたことや、米兵が街中へ出回ることに伴う環境悪化を懸念して1952～53年にかけて国への陳情や村民大会が開かれたが、砂川村のような実力闘争には発展しなかった。これはすでに戦前の軍需工場建設において買収された土地であり、砂川村の人々のように生活の糧である農地を一方的に奪われるのとは根

本的に異なる状況にあったからと考えられる。

1956年2月24日に米軍大和基地は開設された。すでに戦後の企業が使用していた変電所は基地に含まれることなく命を長らえた。この基地も1973年1月23日に日米間で合意に至ったいわゆる「関東計画」により日本政府に返還されることとなったが、最終的にその土地は国と都が分有する結果となり、戦前に軍需工場のために提供された土地は、1㎡も東大和市に返還されることはなかった。

変電所保存に向けた住民運動と行政の対応

稼働中の変電所は他の建物や塀に囲まれた場所にあり、その存在を知る人は社員を除けばごくわずかだった。

1979年、東大和市文化財専門委員会議（当時）では、新たな市指定文化財を選定する会議のなかで変電所の存在を知る委員の発言を発端として、現地視察を行っている。当時の文化財保護法には「戦争遺跡」の概念はなく、むしろ国は文化財として扱うことを積極的に敬遠していた。文化財専門委員たちは「東大和市の歴史・文化にとって価値あるものなら、市の条例に基づき保存すればよい」との考えから指定物件に含めることを答申。しかし、最終段階で所有者である会社の同意が得られず、この時は指定を断念した経過がある。仮にこの際東大和市文化財に指定されていれば、全国で最初の戦争遺跡の文化財指定であったことになる。

1981年、市立中央公民館で郷土史講座「太平洋戦争と郷土」が開催された。変電所や工場用水の配水に使われた給水塔（民有地にあり保存は叶わず、2001年初頭に取り壊し）の存在を知った受講者は自主グループ「東大和の戦争と郷土史研究会」（以下「研究会」と表記）を結成。空襲や軍需工場に関する資料収集や当時はまだ存命者の多かった工場関係者への聞き取り調査を始めた。そして、1988年には給水塔、変電所の保存の請願を市議会に提出し、趣旨採択されている。

1991年12月、研究会は賛同者を拡大し、「東大和の戦災建造物の保存を求める市民の会」を結成。工場跡地が東京都に買収されて都立公園となることが決まっていたため、翌年2月には都議会への請願を行った。

1992年9月の都議会で請願は採択され、都立公園内での保存が決定した。同年12月25日には東京都・東大和市・コマツゼノア株式会社3者による覚書を締結し、会社から市に建物は無償譲渡、都は公園内の変電所の存置を認め、市はその土地を有償で都から借り受け（現在は無償）、保存・管理することとなった。

文化財指定と第1回目の修復工事

1995年10月1日、変電所は晴れて東大和市指定文化財となった。同時に修復・補強工事を実施した。

工事に先立って行った調査では、夥しい機銃掃射痕のある南側壁面では全体の8割の外壁が浮いており、剥落する危険があったこと。屋上からの漏水が深刻であったことなどから、これらを中心に工事が行われた。また保存が叶わなかった変電設備を保護するための擁壁のうち、弾痕のある一部を切り取り、建物の傍に移築した。これら一連の総事業費6,343万7千円（うち補助対象経費6,308万7千円 補助金

3, 800万円<東京都市町村活性化事業・ふるさとふれあい振興事業＝現在は存在せず>)により、1995年10月から翌年3月に工事を行った。

研究会の解散と新たな団体の結成

2012年、研究会は会員の高齢化などを理由に解散した。1981年の結成から30年あまりの活動で、自らの望む完全な保存は実現できなかったものの、1995年には変電所の一部の保存が実現し、その存在が徐々に全国的に知られるようになって、一定の目的を達成できたと判断したためである。

2015年8月、変電所の存在を全国だけでなく、世界へと発信していきたいとの思いから、研究会の運動は今後も続けるべきものと考えた人々が、旧研究会のメンバーの一部も交えて、新たに「東大和・戦災変電所を保存する会」を結成した。

第2回目の修復工事

第1回目の修復・補強工事から四半世紀が経ち、再び劣化が目立ってきたことから、2度目の工事が必要となった。変電所の保存と全国への発信を自らの重要な政策のひとつと考える尾崎保夫東大和市長は、工事の予算の計上とふるさと納税制度による募金（返礼品なし）を実施した。当初は2020年度当初から工事が開始される予定であったが、本集会の見学会に支障をきたさぬよう要請したことを受け、工期を2020年9月から2021年7月の2か年度に組み替えるなど、東大和市からは全面的な協力をいただいた。

2か年の工事費、及び工事監理費予算の総計 124,729,000円

募金（2021年7月31日まで）の総計 13,520,635円

結果的に本集会在1年延期となり、さらにオンライン方式へと移行したことにより、東大和市の協力に報いることはできなかった。2021年10月20日から変電所の一般公開が開始された。コロナ禍が本格的に下火を迎えた際には全国から見学に訪れていただくことを願って報告を終えたい。

東大和市指定文化財「旧日立航空機立川工場変電所」案内

所在地 東京都東大和市桜が丘2丁目 都立東大和南公園内

西武鉄道拝島線・多摩モノレール玉川上水駅から徒歩7分

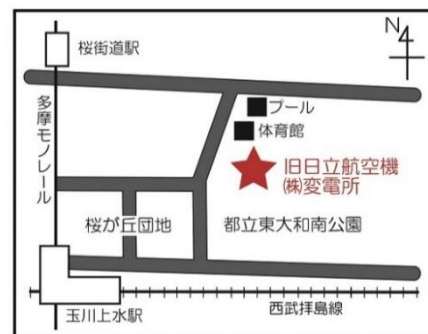
公開日 毎週水・日曜日

公開時間 10時30分～16時

～説明員2名が対応

※公開曜日でも台風などの悪天候や、現在の新型コロナウイルス感染拡大に係る非常事態宣言発出などの状況下においては、公開を中止する場合があります。

詳しくは管理する東大和市立郷土博物館（042-567-4800）にお問い合わせください。



<追記>

新型コロナウイルス感染拡大の影響で延期となっていた変電所の一般公開が、202

1年10月20日からが始まった。シンポジウム開催時には内部の紹介が間に合わなかったが、あらためて修復完了後の「旧日立航空機立川工場変電所」の状況を紹介する。

修復工事竣工後、その内容を後世に残すため銘板に刻まれた「修理記」から、「建造物の概要」を除き紹介する。なお、漢字や送り仮名等は、「修理記」の表記に倣った。

~~~~~

## 旧日立航空機株式会社変電所 保存・改修工事 修理記

### 事業の概要

工事期間 着工 令和2（2020）年8月

竣工 令和3（2021）年7月

建造物の概要 （省 略）

### 工事の概要

#### 1 耐震工事

- ・1回内部の中央北西より1か所に、耐震フレース（枠付鉄骨フレース、片側マンサード型）を設置した。〔1・2回内部の鉄骨補強柱は平成7（1995）年に設置〕

#### 2 躯体およびモルタルの補修・補強と劣化防止

- ・内外壁および天井のモルタル浮き部分に、アンカーピンニング・エポキシ樹脂注入（各多層空隙位置停止対応注入工法）を行った。
- ・屋上スラブ（上面）およびパラペット（内側）の亀裂部分に、エポキシ樹脂注入（自動式低圧エポキシ樹脂注入工法）を行った。
- ・内外壁および床・天井に、浸透性アルカリ性付与材を塗布した。
- ・耐候耐久性確保のため、外壁に保護塗料（水性無機高分子塗料）を塗布した。
- ・背面2階ベランダひさしに、鉄骨補強を施した〔背面1階出入口ひさしの鉄骨補強は平成7年（1995）年に設置〕。

#### 3 屋上防水

- ・屋上のシート防水（後補）および断熱歩行パネル（後補）を撤去し、塗膜防水（高強度ウレタン・ゴムアス複合塗膜防水）を施した。

#### 4 建物活用のための整備

- ・弾痕を有する当初の内部階段を保護するため、その上に重ねて、昇降用の階段（ガラス製段板・鉄骨製ささら桁・ステンレス製手すり）を整備した。
- ・破損していた豎樋および集水器を好感し、意匠を踏襲しつつ、ステンレス製（腐食仕上げ）とした。
- ・脆弱であった背面のタラップ（屋上昇降用）を交換し、意匠を踏襲しつつ安全上支障のない形式とし、ステンレス製（腐食仕上げ）とした。
- ・1階内部に展示用の間仕切・棚・パネル等の造作および照明器具・コンセント等の電気設備を整備した。また、プロジェクターを設置した視聴覚スペースを設けた。
- ・正面エントランス（階段・バリアフリースロープ）、敷地内歩行路（透水性アスファルト舗装）等、外構整備を行った。また、夜間ライトアップのための照明器具を設置した。以上、工事の概要を記し、後資とする。

令和3（2021）年7月

事業者 東 大 和 市  
設計監理 株式会社文化財工学研究所  
施 工 株式会社山口建興

修復を終えた旧日立航空機立川工場変電所写真集成



2回目の修復を終えた変電所全景（南面）



壁面の機銃掃射痕の修復を行わないまま、1993年まで使用されていた。

都立公園整備の際、本来の地表面（変電所が建つG L）よりも50センチほど高く地表面が整備されてしまった。第1回の修復工事では雨が周囲から流入した時には、地中に透過するよう透水管を埋設し、割栗石で表面を覆ったが、その分、歩きづらかった。



今回の修復でバリアフリースロープを設置した。

(左上)

第2回目の修復ではアスファルト通路を設置した。

(左下、右下)



(右) 解体直前の給水塔

変電所と異なり、民有地にあった給水塔は保存が叶わなかった。

戦闘機に錯視を引き起こさせるためのものと思われる迷彩塗装が施されており、機銃掃射の痕跡もあった。

戦時中、給水塔の頂上部に機銃が1台据え付けられて、迎撃していたという。

(下) 2001年に解体された給水塔の一部を切り取り、変電所前に設置した。





1階西側部分に設けた展示コーナー  
 (左上) 南側から北西コーナーを見る。  
 (右上) 南側から北壁側を見る。

(左) 北側から南壁側を見る。

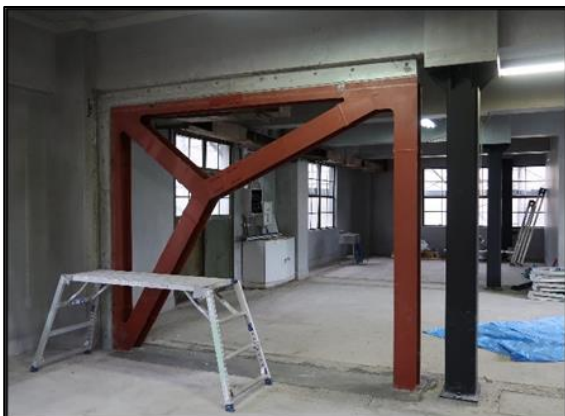


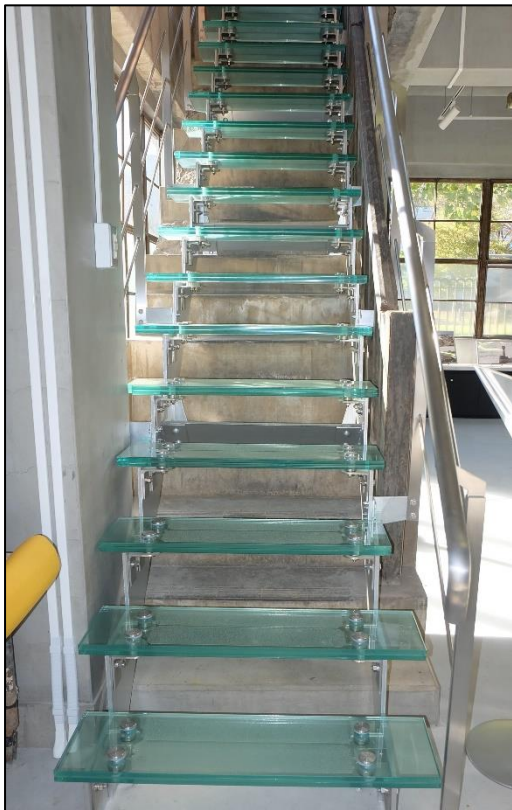
(左下) 1階玄関正面の導入展示コーナー

(右下) 1階東側に設置した映写コーナー

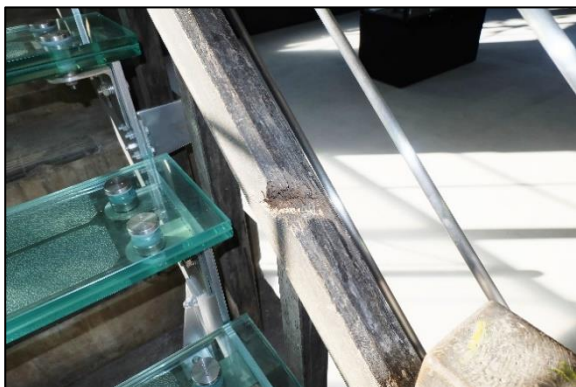
(左下) 新たに設置した耐震フレース (施工中のようす 錆止め塗料の塗られた鉄骨 仕上げは黒塗料) 黒い鉄骨補強柱は1995年の第1回目修復の際に設置したもの

(右下) 鉄柱上部の梁も1995年の工事でもとからあったものを補強した。





内階段にガラス製の階段を設け、機銃掃射の痕跡の残る元の階段の保護と観察を可能とした。



内階段手摺りの2か所に残る機銃掃射痕



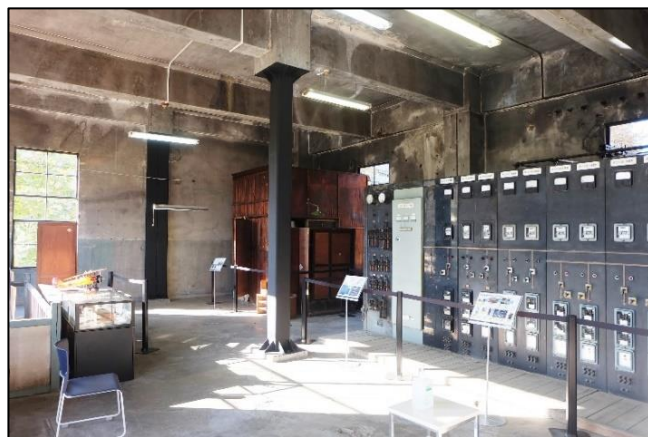
内階段の裏にも機銃掃射の痕跡が認められる。





(左) 1990年に設置された非常用電源（バッテリー直列接続）もそのまま保存した。

(上) その部屋の壁には20センチの壁を貫通した機銃掃射の痕が残る。ある（室内から撮影）。



2階のようす

補強用の鉄柱は1995年の修復時に設置

(上) 右側に見える配電盤のうち一番奥の低圧配電盤のみ建設当初設置のもの 高圧配電盤は戦後入れ替え



建設当初からの低圧配電盤 機銃掃射の痕がみられる。





(左)「低圧配電盤」の表示プレート



(右) 下部に取り付けられたプレート (明電舎製 1939=昭和14年製の刻印がある)



米軍に接収された際に書かれた記号・番号か？今後の調査が必要である。



2階東側にある各施設への配電及び遮断装置

## 多摩地域の自治体の平和への取組

| 自治体名  | 非核・平和都市宣言    | 平和首長会議      | 体験記録集 | 体験映像 | 戦跡マップ | 被爆樹木等 | 平和の日   |
|-------|--------------|-------------|-------|------|-------|-------|--------|
| あきる野市 |              | 2016. 4. 1  | ○     |      |       |       |        |
| 檜原村   |              | 2009. 8. 1  |       |      |       |       |        |
| 東村山市  | 1964. 04. 01 | 2010. 9. 1  |       |      |       | 被爆石   |        |
| 福生市   | 1970. 12. 21 | 2018. 1. 1  | ○     |      |       |       |        |
| 瑞穂町   | 1973. 06. 27 | 2015. 7. 1  |       | ○    |       | ○     |        |
| 武蔵野市  | 1982. 03. 29 | 2008. 8. 1  | ○     | ○    |       |       | 11. 24 |
| 三鷹市   | 1982. 03. 31 | 2010. 2. 1  | ○     | ○    |       | ○     |        |
| 小金井市  | 1982. 04. 01 | 2009. 8. 1  | ○     |      |       | ○     |        |
| 狛江市   | 1982. 06. 21 | 2009. 10. 1 | ○     |      |       | ○     |        |
| 八王子市  | 1982. 06. 29 | 2017. 10. 1 | ○     | ○    | ○     | ○     |        |
| 昭島市   | 1982. 07. 10 | 2014. 3. 1  | ○     |      |       | ○     |        |
| 清瀬市   | 1982. 09. 29 | 2009. 3. 1  |       | ○    |       | ○     |        |
| 立川市   | 1982. 10. 05 | 2018. 1. 1  | ○     | ○    |       |       |        |
| 日野市   | 1982. 10. 08 | 2013. 12. 1 | ○     |      |       |       |        |
| 町田市   | 1983. 02. 01 | 2009. 10. 1 | ○     |      |       |       |        |
| 小平市   | 1983. 03. 03 | 2010. 6. 1  | ○     |      |       | ○     |        |
| 調布市   | 1983. 09. 27 | 2010. 8. 1  | ○     | ○    |       | ○     |        |
| 東久留米市 | 1984. 01. 01 | 2010. 6. 1  | ○     |      |       |       |        |
| 国分寺市  | 1984. 08. 06 | 2009. 6. 1  | ○     | ○    |       | ○     |        |
| 武蔵村山市 | 1984. 08. 06 | 2015. 8. 1  | ○     |      |       | ○     |        |
| 府中市   | 1986. 08. 15 | 2011. 6. 1  | ○     |      |       | ○     |        |
| 日の出町  | 1990. 09. 17 | 2016. 1. 1  |       |      |       |       |        |
| 東大和市  | 1990. 10. 01 | 2010. 8. 1  | ○     | ○    |       | ○     |        |
| 稲城市   | 1991. 03. 07 | 2010. 7. 1  |       |      |       |       |        |
| 多摩市   | 1991. 12. 24 | 2010. 4. 1  | ○     |      | ○     |       |        |
| 羽村市   | 1995. 08. 10 | 2012. 1. 1  | ○     |      |       |       |        |
| 西東京市  | 2002. 01. 21 | 2008. 3. 1  | ○     | ○    |       |       | 4. 12  |
| 国立市   | 2003. 06. 01 | 2010. 7. 1  | ○     |      |       | ○     | 6. 21  |
| 青梅市   | 2005. 07. 19 | 2008. 5. 1  | ○     |      |       |       |        |
| 奥多摩町  | 2005. 12. 08 | 2014. 8. 1  |       |      |       |       |        |